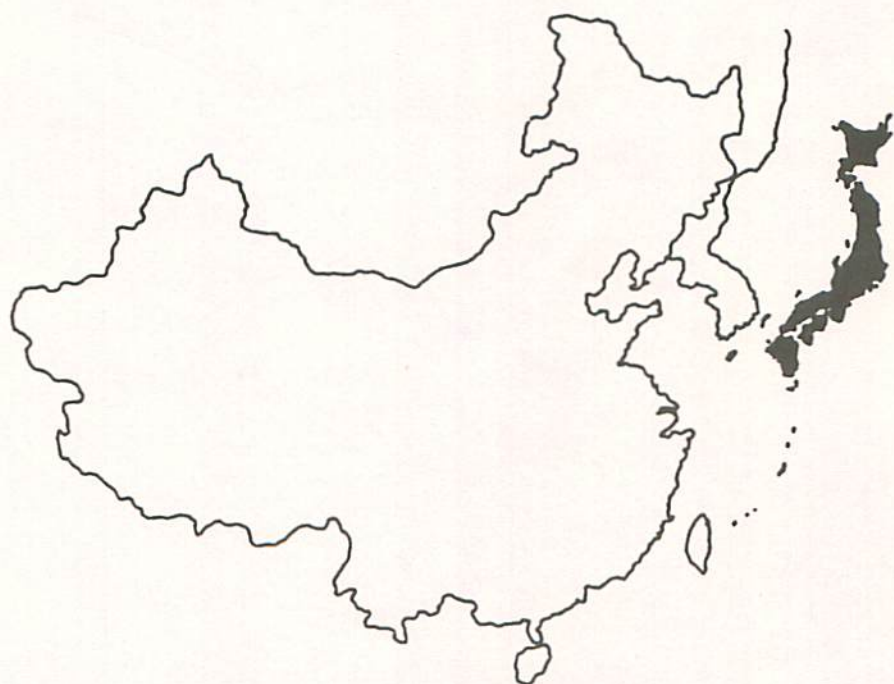


日本ビジネス中国語学会

会 報

第14号



目 次

日本ビジネス中国語学会会報第 14 号

第 14 回総会報告・議事録（要旨）	2
第 15 回公開講演会・シンポジウム	
中国語通訳への道	塚本 慶一 3
放送通訳についてー通訳現場の苦勞話	神崎多實子 11
第 16 回公開講演会・シンポジウム	
OA機材活用によるビジネス中国語教授法の実践	藤本 恒 16
対中プラント輸出と投資についての若干の感想	吉田 鐵也 28
私の中国ビジネスとビジネス中国語	東浦 正重 38
はじめてのおつかい 国交回復前中国訪問記	釜屋 修 46
アンケート結果報告	57
設立趣意書	60
日本中国語学会会則	61
役員名簿	62
入会のご案内	63

第14回総会報告

公開講演会・会員シンポジウム（第16回）を同時開催

日本ビジネス中国語学会の第14回総会が、6月26日（土）午後2時より、大阪市北区の大阪中国語学院において開催され、熱心に審議を行いました。

総会設立を確認後、藤本恒会長が議長をつとめ、2003年度の活動報告、収支報告と今年度の予算案、活動案などの審議を行いそれぞれ承認されました。

1. ホームページの内容の充実化、迅速化を図っていく。
2. 東京、大阪以外の人にも理事に就任してもらえばどうか。
3. 今年度も東京で公開講演会・シンポジウムを開催したい。
4. 中国語検定協会への協力を行う。
5. 会は自立できるように企業意識をもって運営をしてほしい等の意見が出され審議を経て承認されました。



総会の後、公開講演会・シンポジウムが開かれ、藤本恒会長が「OA 機材活用によるビジネス中国語教授法の実践」の演題で、吉田鐵也先生は「対中プラント輸出と投資についての若干の感想」の演題で、東浦正重先生は「私の中国ビジネスとビジネス中国語」の演題で、それぞれ長年の実務経験に基いた貴重なお話をしていただきました。

参加者は熱心にメモを取ったり講師に質問していました。（講演要旨は本号に掲載）
終了後、会場を移して懇親会を催し、親睦を深めました。

日本ビジネス中国語学会第14回定期総会議事録（要旨）

2004年6月26日（土）大阪中国語学院

- | | | | |
|----------|------|---|----|
| 1. 14:00 | 議長選出 | 会則にもとづき藤本恒会長が議長をつとめる。 | |
| 2. 総会成立 | | 現在有効会員56名の内、出席者10名、委任状26名、合計36名。過半数で成立を確認 | |
| 3. 報 告 | | 活動報告（榎原理事長）：資料にもとづき報告。 | 承認 |
| | | 収支報告（岩下孝彦）：別紙の通り収支状況を報告。 | 承認 |
| | | 監査報告（待場裕子）：正確に記帳されている事を認める。 | 承認 |
| 4. 活動案提出 | | 榎原理事長より資料にもとづき提案。 | 承認 |
| 5. 予算案提出 | | 榎原理事長より資料にもとづき提案。 | 承認 |
| 6. 役員改選 | | 釜屋修氏がご辞退された他は全員が再任されました。 | |
| 14:30 | 閉会 | | |

* 総会成立会員数56名は2003年度会費納入者の数で、名簿の員数とは差があります。

中国語通訳への道

2003年11月29日

塚本慶一

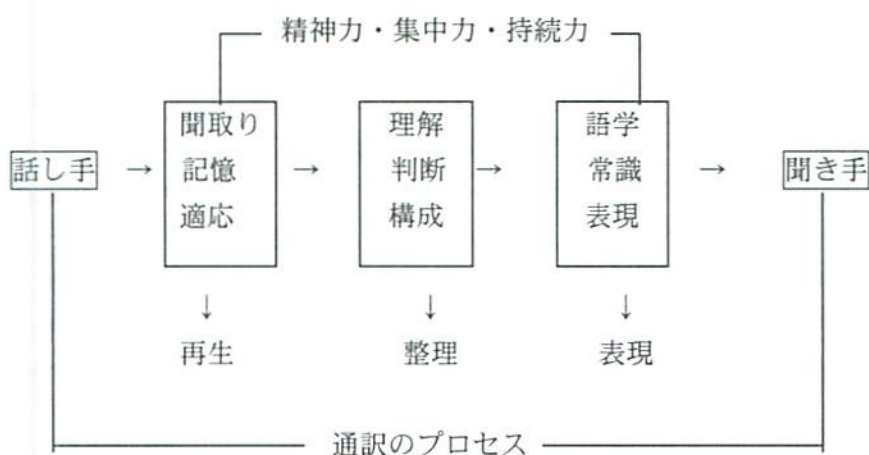
本日は“中国語通訳への道”という拙著に基づいて以下のいくつかの点に分けて述べてみたいと思っております。

●まず“通訳作業のプロセス”ですが通訳というのは、いったい具体的にはどのようなプロセスを必要とする作業なのでしょう。発言者の話を別の言語に訳す作業です。しかし、“訳す”という作業はそれほど単純ではありません。通訳とは決して単純な言葉の再生ではなく、ましてや簡単な言葉の置き換えでも



ありません。通訳は極めて緊張度の高い仕事です。通訳者は瞬時に分析と推敲をしなければならず、話し手の言う意味を正確に理解して訳語を的確に選び、わかりやすくかつすばやく伝える必要があります。

通訳という作業も他の事柄と同様に内在している法則があるはずですが、アメリカの翻訳者 E. A. ナイダ氏などは翻訳作業のプロセスに分析を加えています（『翻訳学序説』1972年）。そうした見解を参考にしつつ、実情に鑑みて、私は通訳作業のプロセスを「再生－整理－表現」の3つのステップに分けられると思います。このプロセスを図で示すとだいたい以下の図のようになります。



●ここで話し手の一言一句をきちんと聞き取ることは、通訳に要求される最も基本的なことです。聞き取ることができて始めて原文の意味が理解できるからです。この聞き取りを

完璧なものにしていくために必要と思われる学習の心得としては、まず“速聴”——通訳者がスタート時点から全神経を集中させ、速いスピードでも完璧に聞き取り、いかなる内容をも記憶でき、それに適応できることが大事である。

それから“多聴”——とくに日本語のあいまいさに主語がはっきりしないことから、論理構造が明確でないことがあります。例えば句読点のことから言うと、日本語には“、”“・”“。”の二つしかないのに対し、中国語ですと“，”“，”“；”“。”の四つもある。それだけに構文はわかりやすく、論理的であります。従って、日本語の場合ですと、多く聞き取ることが必要で、それによって全体のキーポイント、キーワード、キーフレーズを理解、整理することができるようになると思います。

さらにもう一つ“精聴”——良いもの、使えるもの、役に立つものをじっくり、くり返ししながら聞き取ることによって当初の興味のある分野のものが、やがて得意な分野へと変わり、最終的には英語のように得意とする分野以上に専門分野が持てるほどの通訳者になれると思います。

以上の“3聴”を通して、集中力、記憶力、適応能力を高めるほかに、中国語の抑揚強弱、長短緩急にも強くなると思います。

●それから“通訳のプロセス”の中にある、理解—判断—構成とは、さきほど述べた日本語のあいまいさなどから、或いは話し手の不慣れなど難点がある場合が少なくありません。そこで、内容を理解しやすく、判断を正しくするように構成すると、そこで初めて話し手の内容を自信をもって、かつ整理された形で、聞き手に伝えることができ、そうすればおのずから受け入れてもらえるわけであります。

●さらに語学力を使って、相手に伝えられるようにするにはここで“3S”、“3読”、“3声”をおすすめいたします。

まず“3S”——これは、“スピーチクリニック”、“スピーチコミュニケーション”、“パブリックスピーキング”を指します。先ほども述べましたように、通訳というのは話すことが仕事です。したがって通訳技術や語学そのものの学習が重要なのは言うまでもありませんが、それと同じくらい話し方の学習がたいせつです。

スピーチクリニックでは、正しい発音・四声で話すことを目標とします。

まず正しい発音・四声ができているか、中国語らしいリズムで話せるか、間の取り方はどうかなど、さまざまな面からチェックします。これは、実際のところ、なかなか一人でするのは難しい学習です。自分の話した中国語をテープに録音して、自分でチェックする手法もないわけではありませんが、やはり正しい発音と話し方ができるネイティブスピーカーの先生について学ぶのが最良の方法と言えるでしょう。さらに理想をいえば、日本人の発音や声調習得上の弱点をよく理解しているネイティブスピーカーであることが望ましいと思います。矯正された点はすぐその場で直すようにしなければなりません。そして矯正されたその日のうちに、その箇所を何度も繰り返し練習しましょう。

発音矯正は、学習歴が浅いほど有効で、短期間のうちに成果を得られます。できれば中国語の学習を始めて3年以内にスピーチクリニックを受けることをお勧めしたいと思います。しかし学習歴が長くても、よい先生について真剣に練習すれば必ず矯正することは可能です。諦めてはいけません。

スピーチコミュニケーションでは効果的なコミュニケーション、言い換えればコミュニケーションを豊かにするための方法を習得します。コミュニケーションですから、当然のことながら独学というのはむずかしいかもしれません。互いに切磋琢磨できる、よい学習仲間が必要となるでしょう。

パブリックスピーキングは、スタンダードな話し方と人前でのスピーチの方法を学びます。必ずしも専門的な技能の習得は必要ありませんし、むずかしく考えることはありませんが、これも一人で学ぶのは不可能です。まず教室のような一定の人数が集まる場所が必要です。日常の生活の中で、人と話す時に、聞きやすい明瞭な発音・発声で話しているか、自分の言いたいことを豊かに表現できるか、堂々と人前で話せるかなどの点を心掛けるだけでもよいのです。よく、椅子に腰掛けたままなら緊張せずに話すことができるのに、人前に出たとたんに、むやみに緊張し、普段の実力の半分も出せないという人がいます。“自分はあがり症だから……”と諦めないでください。パブリックスピーキングの練習を積むことによって必ず改善されます。

会議やレセプションなど特に逐次通訳の場において、通訳者は主役ではありませんが、大勢の注目を集める存在です。発言者が一区切り発言した後、通訳者が通訳し始めます。その時、会場にいる多くの人の目が通訳者に注がれるのです。静まりかえった大きな会議室で、あるいは千人以上を収容できるバンケットホールで、そこにいる人全てが通訳者に注目し、通訳するのを待ち構えている……そんな状況を想像してみてください。特にあがり症ではない人でも、相当緊張する場であることは確かでしょう。だからこそ、パブリックスピーキングの練習を積み、人前でもあがらず、明瞭な声で話す練習がたいへん重要なのです。

しかし通訳者も人の子。ある程度あがるのも仕方のないことですが、問題は如何に対処するかです。やり方はいくつかありますが、一つには、自己暗示によって、自らを最善、最良の状態に置くようにすること、あるいは腹式呼吸を練習して楽に発声できるようにすると、多少あがってしまっても、うまく話ができるようになります。

次に“3読”とは、多読・速読・熟読のことです。多読でより多くの中国語をインプットし、速読で中国語をより速いスピードで理解し、熟読で文章構造とニュアンスを把握します。

多読は文字どおり多くの中国語を読むことです。学習歴が長く、たくさんの語彙や構文を学んだにも関わらず、トンチンカンな中国語を話したり、書いたりして平然としている人がいます。どこが間違っているのか、おかしいところがあるのかないのか、自分で判断できないのです。中国語のインプット量が圧倒的に足りないために、学んだ語彙や構文を応用できない、もっと単純な言い方をしますと、中国語の感覚が身についていないのです。多読は声をださなくても練習できますから、あなたの心掛け次第でいつでもどこでもできる練習です。もちろん素材は何を選んでもかまいませんが、一つの分野に偏ることなく、様々な分野の読み物に挑戦してほしいと思います。

速読はとにかく速いスピードでどんどん声を出して文章を読んでいくのですが、最初は1秒間で1文字くらいの速さで読みましょう。それができたら、次は1秒間に2文字ぐらいを読む速さを目指します。もちろん出来るならばもっと速くてもかまいません。1秒間に3

～4文字程度の速さにまで到達できたら、今度はゆっくり読んでみてください。ずいぶん余裕を持って読めるようになっていくと思います。そして読むのに余裕が出てくると、文章自体の意味や構文なども分かるようになり、中国語の音もきれいに聞こえるようになります。学習歴の短い人は少したいへんかもしれませんが、誰にでもできる簡単なトレーニングで、必ず効果が得られます。

熟読は単語の意味や文章の意味、構成をじっくり考えながら声を出して読むことです。

ご存知のように、中国語には非常にはっきりした抑揚強弱、長短緩急があります。この点を常に意識しながら読んでいきます。単語の意味、文章の構成などをよく分析し考えれば、平坦な読み方はできないはずです。ああ、ここは盛り上げるところだな、ここは少し沈んだ調子で読んだ方がいいな、などと波をつけながら読んでいくと、自然とその文の表現する雰囲気の中に入っていくことができ、楽しく読めるのです。先に述べた速読と平行して練習していけば、メリハリかつスピード感のあるネイティブ・スピーカーに近い感じで読めるようになります。

それから“3声”とは、“声量”（ボリューム）・“声調”（リズムやトーン）・“声風”（パーソナリティー）のことです。これも一般的な語学の学習ではさほど問題にされませんが、通訳者には必ず求められる要素です。

“声量”は通訳者にとってことのほか大切です。なぜならば通訳現場の状況は実にさまざまだからです。工場、会議室、応接室、広い宴会場、ホール、あるいは野外という場合もありますし、それぞれの場所に常にマイクが置いてあるとは限りません。これらの場所をイメージしてみてください。それぞれの状況に応じた声のボリュームが必要だということが自ずからわかるでしょう。

“声調”、これは話す調子のことです。あなたは一本調子の、めりはりのない口調で話す人の話を聞きたいと思いませんか。もちろん NO でしょう。でも、あなた自身が話をするとき、声の調子についてどれくらい意識しているでしょうか。

通訳は話を聞き手に伝えなければなりません。通訳者が声を発し、聞き手の耳に届け、聞き手にそれを受け入れられてこそ“通訳”という作業が成立するのです。聞き手に受け入れられない声の調子で話していても、“通訳”の善し悪しを論ずる以前の問題で、“通訳”が成り立っていないということになります。

あなた自身が聞き手の立場に立って想像し、聞き手を引きつける声の調子とはどういうものか、よく考えてみてください。そして聞き手に受け入れられる声の調子を常に心掛けてほしいと思います。

“声風”も大変重要な要素です。ただ、ここで言うパーソナリティーというのは通訳者自身のパーソナリティーではありません。話し手（スピーカー）のパーソナリティーを反映させることの重要性です。しかし、一方、通訳者は“空気のようなもの”であっても、一定の存在感、即ち通訳者自身のパーソナリティーが自ずから表われ、それが通訳の出来を決定することもしばしばあるということも付け加えておきましょう。

●さきほどの“通訳のプロセス”という図にもどりますが、語学のあとに“常識”が書き示されています。ここで言う常識とは、職業実務に係る知識や背景知識及び中国に関する諸事情に精通し、話し手の内容を理解でき、共感まではしなくとも、要するに適切な判断

が下せることでそうすれば、信頼される存在になり得るのです。

そのあとにある“表現”とは、まさに“3S”の中にあるパブリックスピーキングを通して鍛えられ、雰囲気をつくり出し、一種のパフォーマンスを完成させるようにすることです。そうすることによって始めて真に迫り、聞き手を感動させることができるのです。

●最後に訳すということになりますが、言うまでもなく、それはいままで述べたことをしっかり把握した上で、始めてできるものです。そして訳出するに当たり最も肝要なことは、“正確さ”、“わかりやすさ”と“すばやさ”という“3サ”です。つまり、“正確に訳す、わかりやすく訳す、すばやく反応して訳す”ということです。

正確さというのは、単なる言葉の置き換えではなく、発言者の意図を正しく把握して情報を正しく伝えるということです。

わかりやすさというのは、言い換えれば独り善がりの通訳をしないということです。通訳というのは、聞き手に理解されて初めて成り立つものなので、自分だけがわかっていても全く意味がありません。常に聞き手の立場を思いやって訳出することが求められます。

例えば“刎頸之交”という言葉が発言者が言ったとしましょう。ある通訳者がそれを「刎頸の交わり」と訳しました。ここまでですと、なにも問題はなさそうですが、しかしその話を聞いている聞き手の大半が小中学生だったらどうでしょうか。小学生に「刎頸の交わり」と言っても理解されません。したがってこの通訳者は正しい訳語を選んだけれども、通訳としてはミスを犯した、つまり評価されないということになります。この場合通訳者は聞き手のほとんどが小中学生だということを念頭において、別の訳語を選択するべきでした。例えば「一番大切な親友」、もっと説明できるならば「生きるのも死ぬのも一緒に考えるくらいとても大事な友だち」という訳語を使うべきだったのです。

すばやさというと、同時通訳を思い浮かべる人もいるかもしれませんが、そうではありません。逐次通訳の場合もすばやい反応と訳出が必要です。逐次通訳は発言者の発言が一区切りしてから通訳を始めるわけですが、発言者の発言が終わってから、どれくらい後に通訳し始めるのでしょうか。5秒後？10秒後？いいえ、どちらも長すぎます。実際には発言者が話し終えてからほんの1～2秒で通訳を始めなければなりません。5秒以上通訳者が沈黙していたら、聞き手は「通訳はいったいどうしたんだ」と怪訝な表情をするに違いないのです。発言者が話し終えてから15秒間考えてベストな訳ができるよりも、そこそこの訳で1～2秒で訳し始めるほうが評価されるということも多いにあり得るのです。もちろん1～2秒でベストの訳ができればそれに越した事はありませんが。すばやく反応して、正確に、聞き手にわかりやすく訳す、言葉で言うのは簡単ですが、言葉という生き物を相手に、この“3サ”の域に達するのは容易ではありません。

●さて通訳上達のためには、まずモチベーションを高める必要があると思います。モチベーションとは、意欲、目的意識をしっかりと持つこと、またやるには、やりがいつまりやる価値をしっかりと認識する必要があると思います。そのためにも、学習の“場”、“友”、“師”という三つの要素が必要だと思います。

“場”とは一流の学習環境、つねに実践的な授業を提供してくれるようなところで、かつ実演を通じて、しっかりと語学力や各技法、マナー、知識、情報などを身につけていく

場。

“友”とは一流をめざす学友とともに切磋琢磨をしながら、おのれを高めていく、いわば“相互幫助、共同提高”していくことのできる友。

“師”とは、一流の現役通訳者一師のもとで、師に学び、師を意識し、いつか師に追いつき、追い越せるように、それでこそ一流への道も可能となるわけでしょう。

それから、母語の大切さを強調したいと思います。私たち日本人は日本語を話し、聞き、書くことができます。母語は外国語にくらべて語彙も豊富で表現力もあるのは当然のことです。しかし、通訳という仕事に就く限り、ただ話せる、聞ける、書けるだけでは不十分です。母語のブラッシュアップをおろそかにすると、たとえば日本語を母語とする人が、中国語から日本語への通訳をする際、どうしても中国語に引っ張られてぎこちない日本語訳になってしまうということになってしまいます。これでは通訳者として評価されません。よりスムーズな日本語訳となるよう、日本語のブラッシュアップを常日頃から心がける必要があります。

そのほか、アンテナをはり、インターネットなどから最新の情報を入手、活用すること。ただ情報が錯綜し混乱しては困るわけで、その事実と真実を分別できるようにしなければなりません。

また将来のことを思うと、より専門性の高い通訳者をめざす必要があるでしょう。まして、中国語はいま英語に次ぐ国際語としての高いステータスから今後各分野、各専門へ進出することから、英語のように得意とする分野以上に専門分野を持つ必要性が出てくると思います。

●最後になりますが、中国語通訳への現状と展望について述べてみたいと思います。

その前にまず通訳の種類と形態について、中国語通訳の現状に基づいて触れてみます。

通訳の種類は、大きく次の四つに分けられます。

観光ガイド通訳—観光専門のガイド（ガイドの説明を通訳する場合と中国語で直接ガイドをする場合がある）。主として旅行社から依頼による。添乗員の業務を兼務する場合もあり、名所旧跡の知識や歴史の知識、各地の事情に関する知識が求められる。

随行通訳（アテンド・エスコート通訳）—来日した代表团あるいは訪中代表团について行動をともにし、滞在中のホテルの送迎、表敬訪問、視察、商談、会議、パーティ、観光などの通訳をする。このうち、表敬訪問、商談や会議は別途会議通訳を手配する場合もあり、ケース・バイ・ケース。つまり、エスコートと会議通訳を明確に分けて担当する場合とすべて一人で担当するケースがあり、エージェントやクライアントによって異なる。日本の代表団の訪中に随行する場合は上述のすべての業務をこなすことが多いが、観光のみ、別途中国側旅行社のガイドを手配する場合がある。したがってこの場合には、メインの会議の通訳をこなせる会議通訳者を派遣することが多い。

放送通訳—テレビのニュース番組などの通訳。同時通訳、時差同時通訳（あらかじめ受信したものをテープに録画し、日本語に翻訳して放送時に中国語の音声に合わせて日本語で訳文を読み上げる）、テープの翻訳作業、テロップ作成など。

会議通訳—主に国際会議・セミナー・シンポジウムの通訳（同時・逐次）。

以上は、通訳の種類ですが、さらに細分しますと、上述のほかに警察・法廷通訳、芸能

通訳、研修・商談通訳や企業内通訳（正社員として企業に所属する場合および契約社員として委嘱され、企業内の対中業務、主に通訳や翻訳の仕事をする）もあります。分野は多岐にわたっており、会議通訳レベルでは政治・外交・経済全般・科学技術・文化・社会など一通りすべて対応できる能力が求められます。

次にこの中国語通訳の市場についてですが、市場の背景となる日中関係を見てみると、日中関係が成熟し、実務者レベルの会議が年々飛躍的に増えています。それに加え、中国の WTO 加盟に伴ない、ビジネスも一層活発になることが予想されます。更に中国の国際社会における地位の向上に伴って、中国の国際会議の参加がたいへん増えていることも事実です。このような背景を見ますと、英語通訳の市場に較べて、その規模はまだまだ限られています。中国語通訳の市場は今後拡大こそすれ、縮小することはあり得ないといえるでしょう。中国語通訳者のニーズは今後とも増加傾向をたどることは容易に推測されます。

中国の WTO 加盟以外にも明るい大きな発展要素があります。皆さんご存知の 2008 年の北京オリンピック開催、そして 2010 年に予定されている上海万博の開催です。近い将来予定されているこれら 2 つのビッグイベント及び F1 グランプリ（上海）やユニバーサルスタジオ（無錫）などは、中国語通訳者に一時的であれ、大きな市場を提供することになります。実際、現在通訳学校で勉強をしている受講生の中には、2008 年の北京五輪や 2010 年の上海万博に通訳として参加することを目標の一つとしている人も少なくありません。またこのイベントが日中関係に与えるプラスの影響は計り知れませんが、これを機に日中関係がより成熟し、密接になり、一層往来が頻繁になることでしょう。

中国の国際社会における地位が高まるにつれて各種の国際会議への中国の参加が不可欠になっており、こういった場での通訳者の活躍の場も広がっていくと思われますし、今後は中国のマスメディアからの発信も増加し、放送通訳者（地上波、衛星など）の需要が増えることも予想できます。

市場に対する私の楽観論とその根拠をお話ししたところで、今度は現在活躍している中国語通訳者の現状について少し述べてみたいと思います。

中国語通訳者はその市場の規模が限られていることなどから、なかなかそれぞれの専門分野を特定して仕事を展開することができません。もちろん得意な分野やよく仕事を依頼される分野というのはキャリアを積むにつれて徐々にできてくるものではありませんが、それでも「私は経済と金融分野の通訳者です」と名乗る通訳者はいないのが現実です。エージェントから依頼があれば、予定が入っていなければ、どんな仕事でも引き受けています。幅広い知識と柔軟な思考、そして貪欲なまでの好奇心と通訳という仕事に対する一種の使命感のようなものを持っていないと到底続けられるものではありません。

現在、同時通訳をこなせる会議通訳者は英語約 200 名に対し、中国語は 20 名足らずと推測されます。今後の市場拡大とともにレベルの高い中国語通訳者が多く育つことが期待されます。

エージェントが仕事を依頼する際、各通訳者のキャリアをもとに発注するケースがほとんどです。通訳の仕事は一件ごとに通訳者への評価がなされます。エージェントがクライアントに対し、派遣した通訳者の仕事のできはどうであったかを確認します。できが悪け

れば、あるいはクレームがつけば、もう二度とそのクライアントやエージェントから仕事の依頼は来ないということもあり得るのです。逆に評価がよければ次回、同様の仕事があればまた依頼が来ることになります。このように、通訳者の仕事は、毎回試験を受けているようなものです。その試験の成績表ともいえる実績こそが通訳者を評価するもっとも有力な根拠となります。しっかりとしたエージェントからは毎年実績表の提出が求められます。

われわれ中国語通訳者をとりまく環境や条件も、この20年ほどで徐々に整備されてきたと言えましょう。しかし通訳者の立場から申しますと、より一層の整備を求めたいというのが本音です。英語通訳を使い慣れているクライアントやエージェントは、通訳業務とは何かを熟知していて問題は少ないのですが、それでも、中国語通訳の特殊性まで認識している方は非常に少ないのが現状です。一つ例を挙げますと、中国の習慣によるものですが、会議での発言者は原稿を準備してそれを読むことが多いにもかかわらず、事前に原稿を手ささせてくれない、中国語の固有名詞は日本語の発音で通訳しなければならないほか、中国独特の略語や新語があり、正確な意味を確認する必要があるにもかかわらず、事前の打ち合わせもさせてくれないなど……。現在活躍している通訳者がことあるごとに訴えてきたおかげで、以前に比べると随分改善されてはいますが、まだ認識は徹底しているとはいえません。通訳者自身が問題意識を持って問題の改善や、環境の整備に努めるのは必要なことですが、現実にはなかなか難しいようです。今後良好な日中関係の発展により、クライアントやエージェントだけでなく、中国語通訳者に対する幅広い支持と認識を得られるよう期待したいものです。

この通訳者業界では女性が圧倒的に多いというのは一つの特徴です。では、女性通訳者が働く環境としては恵まれているかということとそうとも言いきれないようです。私が聞いた話によりますと、一緒に仕事をするクライアントの担当者は男性がほとんどで、随行通訳や出張などの仕事では、まるで雑用係のような仕事をさせられたりすることもあり、通訳者自身もそれに甘んじる人や進んでそれを買って出る人も一部にいます。通訳はサービス業とはいえ、あくまでも通訳業務を通してサービスを提供するという意味です。協調精神や思いやりは必要ですが、通訳の社会的地位を向上させるためにも、プロとしての自覚を持って、節度ある行動を心がける必要があります。

繰り返し述べますが、中国はたいへんなスピードで変化しつつ発展しています。そういう中国と日本との交わる点にいる私たち中国語通訳者は、とてもスリリングでエキサイティングな体験（仕事）をしています。もちろん仕事ですからそれなりの苦労はありますが、その苦労以上の充実感を味わっていることも事実です。私たち通訳者、そして中国語通訳者をめざしてがんばっている皆さんにとって将来は明るく輝いています。中国語通訳者の市場は新しい若い人材を渴望しています。通訳の勉強を続けるのはたいへんなことではありますが、志を曲げずがんばってほしいものです。

放送通訳について —通訳現場の苦労話

2003年11月29日

神崎多實子

みなさん こんにちは。

通訳ではなく、「講演」ということで登場するとなると、やはりいささか勝手が違いますね。通訳の場合、事前に考えることは、「スピーカーは一体どんな話をするのだろうか、それにうまく対応できるだろうか？」など



ですが、いざ自分が講演しなければならないとなると「何を、どのように話せばいいのか？」ということで、頭を悩ませる。ただ「何を話すか」裁量できるわけですから、自由であり、より創造的な感じがします。そういう意味では、通訳とは、スピーカーに左右され、ある一定の枠のなかでの作業です。しかしやはり限りなく奥の深い仕事だと思います。それも言葉だけでなく、いろいろ比較対照することによって、自らを切磋琢磨し、多くのことを学べるのではないのでしょうか。

今日のテーマは「放送通訳について」ですが、1989年にスタートしたNHK BS1での私の仕事にまつわる体験談を中心にをご紹介します。

一 放送通訳とは（TVを中心に）

聞くとところによれば、現在16ヶ国語のニュースを放送しており、NHK情報ネットワーク、バイリンガルセンターには1000人近くの通訳者が登録されているそうです。私は放送通訳の仕事にたずさわるようになってから15年近くなりますが、別にNHKの職員ではありません。ただ常時放送通訳をするレギュラーメンバーの一人で、中国語スタッフ約15人がローテーションを組んで対応しています。

新聞のテレビ番組欄を通して、すでにご存知だと思いますが、現在NHK BS1で放送されている中国語オリジナルによるニュースその他は、時により変更がありますが、およそ下記の通りです。

CCTV ニュース	(AM 9.20～9.30)	火～土曜
CCTV と上海TV ニュース	(AM 2.07～2.25)	月～金曜
香港フェニックスニュース	(PM 19.02 から 19.07)	月～金曜
香港フェニックス時事弁論会	(PM 19.22 から 19.50)	月～金曜

通訳の形態は、主に時差同時通訳、つまり事前にキャッチした中国語のニュースをモニターしながら日本語に訳し、その後翻訳原稿を見ながら、映像に合わせて読み上げるのです。

そのほか一部同時通訳による生放送があります。これはごく僅かですが、鄧小平氏追悼式、香港返還式典、建国 50 周年祝賀行事、最近では「神舟 5 号」有人宇宙船の打ち上げなどがあります。同通の生放送とは、つまり実況放送の映像を見ながら、その場で中国語から日本語に訳していくのです。トチっても、間違っても出たとこ勝負、流れた音声を、後戻りさせることはできません。(以上詳細は待場裕子先生との共著「中国語通訳トレーニング講座」東方書店出版に掲載)

二 放送通訳に求められるもの

◎ 何よりもまず速さ一時間との競争

時間に追われることなく放送通訳の仕事ができればどんなに楽しいことか、とよく思います。しかしニュースと言われる以上、ゆったりした気分でやっていたらそれこそ“新聞”ならぬ“旧聞”になってしまいます。時差通訳の場合、中国語のニュース 1 分当たり、日本語訳に費やす時間は、内容にもよりますが通常 30 分くらいでしょうか。つまり録画を視聴しながら、それを直接日本語に訳し、書き留めていくのです。この作業は、まず中国語の書き取りをしてから、それを日訳しているのでは間に合いません。一般の通訳業務の時にスピーカーがしゃべりだしたら、頭はすぐにフル稼働し、頭の中で訳し始めるのと同じ状態です。そして聴きながら原稿を作っていきます。

一方普段の通訳と異なる点は、放送に当たって発話する際、絶えず映像を意識し、映像にぴったりついていかなければならないことです。画面はすでに農村風景に移ったのに、まだ工場のニュースを通訳しては、ちぐはぐになってしまいます。またご承知のように中国語は短いセンテンスのなかに多くの情報が含まれています。つまり半導体のチップに喩えれば、密度が濃く、「賢く」できているのです。ですから内容の一部、例えば形容詞をカットする、また動詞の重複を避けるなどして次々と変化する TV の画面に遅れをとらないよう心がけなければなりません。

◎ リスニング力

これらの作業にすばやく対応するには、まずリスニング、聴く力を付けなければなりません。ただリスニングの向上はそう容易いものではありません。私は、中学生の頃、初めて中国の学校に入り、中国語を耳にした時、中国語のあまりの速さにびっくりしました。しかし半年ほど毎日授業を聞いているうちになんとなく意味がつかめるようになりました。こうして中国の学友と 4 年余りともに過ごし、帰国する時には、かなりリスニング力がつき、一番好きな科目は“語文課”になっていました。

その後、といっても国交回復以前の頃ですが、中国語研修学校で教鞭をとるようになってからおよそ 5 年間、“听广播课”を手がけました。中国通信社から放送のテープをお借りして、まず自分で書き取りをし、授業で生徒さんになんどもテープを聞かせ、最後に答

案として私が中国語で記したニュース原稿をお渡しするという方法でした。もちろん答案がすんなり出来上がるわけではありません。準備にける時間は大変なものでした。でも今にして見れば、私のリスニング力の基本はあの頃に培われたのだと思います。もしかしたらあの時一番勉強したのは、教師の私だったかもしれません。

しかしいまでも、多くの難題にぶつかります。例えば企業名など固有名詞もその一つ。

上海TVのニュースで最近ぶつかったのですが、薬局の名前で“hua yuan”、“国大”と出てきました。「国大」は画面に出てきたので問題ないのですが、前者の“hua yuan”が分からない。音声を収録する時間が迫っても確認できない。そこで「花園」、それも訓読みで「はなぞの」としてしまったのです。ところが実際は“华源”。でも時すでに遅し、これはカットすればよかったと思います。

なかでも頭の痛いのが海外企業の名前、例えば“摩根大同集团”、これは字幕にあったので、聞き取りは問題ないのですが、どう訳すかの問題です。結果はJP・モルガン・チェース社、これは中国の指導者が同社の幹部に会ったというニュースですから、カットするわけにはいきません。海外企業名リストやらインターネットで確認するなど苦労しました。

◎ 新語、略語への対応

例えば、“制衡”、どの中文日訳の辞書にも見当たりませんでしたが、「新華新詞語詞典」に“相互制约，使趋于平衡”と記されていました。センテンスを短くするため「バランスを保つ」としておきました。

また最近よく見かけるのが、“平台”（プラットフォーム）、もともとコンピュータ関連で使われていたのが、今では“服务平台”、“对话平台”などいろいろなところで用いられるようになっていきます。この場合「サービス・プラットフォーム」では意味不明だし、「サービス態勢」「対話の場」？どう訳せばいいか迷うところです。そのほか“一门式（一站式）服务”「ワンストップ・サービス」つまりあちこち廻りされるのではなく「一括サービスの提供」など、枚挙に暇ありません。

略語も然り。例えば、“公投”（公衆投票）すなわち「住民投票」、「制宪」（制定宪法）…等々、これは訳の問題ではなく、時事問題に通じていないと初めて耳にした時迷ってしまいます。

◎ 内容の要約、表現力

放送通訳の仕事で項目取りというのがあります。つまり一本目のニュースの主な内容、二本目の内容と順次書き記していくのですが、一分程度のニュースを長々と書くのではなく、要約し、見出しをつけていく作業です。これも伝送されてくるニュースを聞きながら即座に書き記す。つまりニュースの要点、ポイントを速く、適確につかむ必要があります。

◎ 発話に対する注意

この場合の発話は、つまり日本語になります。日本人が中国語を学ぶ際にまずぶつかるのは中国語の発音の難しさですが、日本語のアクセントもかなり複雑です。例えば「支援」、「援助」などのように、アクセントは「支」、「援」にあり、一般的には前に置くほうが聞

きやすい。しかし「洪水」のようにアクセントが後ろの「水」にくる場合もあります。ある通訳者から「突破」はどうですか？と聞かれたので私は「アクセントは前」と答えたのですが、読み方辞典では「アクセントを前に置いても、後ろに置いてもよい」となっていました。

もちろん日本語ネイティブにとっては、日本語の発音にさほど拘らなくても自然に正しく言えるわけですが、中国語ネイティブにとっては頭の痛い問題です。これを教育の現場と比較してみますと全く同様の現象が見られます。すなわち日本人にとっては、中国語のリスニングが最大の難関、中国人にとっては、中国語ニュースの理解は即座にできても発話の段階で意味不明になったり、聞き取りにくい日本語になったりすることがしばしばあります。これは放送の作業現場でも全く同様で、両者は正に“取长补短”の間柄にあるといえましょう。

◎ グローバル化、多様化への対応

ここでいうグローバル化は、現場に即しての言語上のグローバル化にすぎませんが、例えば中国のニュースに韓国の「現代グループ」にかんする話題が出てきたとします。以前ならそのまま「げんだい」と言えばよかったのですが、最近は「ヒョンデ」としなければなりません。人名なども韓国語読みにすることになり、これも頭の痛い問題です。

また特に朝の CCTV は国際ニュースが多く、例えばイラクの地名、武器などに苦労しました。

これは会議通訳の現場でも同様ですが、グローバル化にともない、日本と中国二国間の話題だけでなく、多岐にわたる内容に対応しなければならず、それだけ通訳をめぐる環境も厳しくなったといえましょう。

三 最近の状況と現場での対応

以上時差同時通訳、つまり原稿あり（と言っても自分で手がけた翻訳原稿）同通を中心に説明しましたが、ここでは少し同時通訳による生放送についてお話をします。この場合、概ね現場からの生中継、例えば香港返還の際のセレモニーや建国 50 周年の祝賀式典など、内容は様々ですが、事前に準備するにしても、江沢民前国家主席のスピーチ原稿が手には入るわけではなし、式典が近づくと不安が募るばかり。そこで香港返還の時は、人民日報の社説などを切り貼りして、それをベースに「私ならこうしゃべる」？という原稿を作りました。結果は似て非なるものでしたが、ただ度胸をつけるのには役立ったように思います。

しかしいつも「まずまずの成果」が得られるわけではありません。1999 年の「9.25 台湾地震」の時のことです。「地震」は、日本でも多発しますし、自然現象ですから、およそ用語を想定できます。後は地名などを事前に掌握しておけば、多分どうにかなるだろうと考えていました。ところがそうは問屋が卸さないとはこのことでしょうか。

まず台湾の記者が「総統が現地に赴き…」と話し始めた途端、そのまま日本語で「総統」と言えばいいものの“总统”→「大統領」という常日頃の習慣で「大統領」と言ってしま

いました。ややあってスタッフが静々と放送室に入ってきて、「大統領× →総統」と記した紙を、通訳をしているパートナーと私の目の前に差し出しました。「国軍→兵士か部隊」等々、たしかに台湾関連にはタブー用語がいろいろありますが、同通に夢中になっているうちにそんなことは後ろに追いやられてしまったのです。台湾に関する同時生放送は、幸か不幸かあの時限りで、それ以降依頼されていません。地震といえどもやはり政治と関わりがあることを改めて実感しました。

2003年10月15日の有人宇宙船－“神舟5号载人飞船”の打ち上げの時でした。飛行士の名前“YANG LI WEI”は、最初「楊立偉さん」かな？と思ったのですが、実は“杨利伟”、“ヨウ リイ”さんでした。これは直前に確認することができました。

問題はその後の専門家との一問一答です。“ya yinsu”？“亚因素”？「二次的要因」？専門家の回答がよく判りません。しかもかなりのスピードでまくしたてます。とうとうお手上げ、そこの部分は、質問も答えも素通りしてしまいました。そしてしばしの沈黙の後また次の質疑応答に移りました。その後の調べで、正解は“亚音速”、日本語でも「亜音速」でいいそうです。

そのほか、北京オリンピック招致、“申办 2008 北京奥运”決定の時の生中継で、私は、イベントがどこで行われるか、会場の名称に拘りました。事前に調べたところ北京の“中华世纪坛”。それが仮になにげない単語であっても、一瞬の迷いが次の聴き取りに影響を及ぼすので怖いのです。おかげで、この時は滞りなくスムーズにいきました。(会場でお見せしたVTRをここでは省略せざるをえないのが残念)

四 結び

中国語を学び始めてからすでに半世紀、最後に次の二つの言葉をみなさんに贈りたいと思います。

“吃一堇(qian) 长一智”、「失敗は成功の母」とでも訳しましょうか。失敗を繰り返しながら成長してきたのだと思います。

思い起こせばいろいろな出会いがありました。

長春の東北師範大学付属中学での4年間、1953年帰国後、初めての中国語通訳一般募集に受かったこと、それは中国語の通訳だというだけで、刑事に追われた苦しい時代でもありました。LT(廖承志、高崎)貿易事務所に勤務した頃、国交回復前の中国語研修学校での教師生活、北京中国画報社での翻訳の仕事、東洋(現UFJ)信託銀行に勤めた10年間、サイマル・アカデミーでの教師と会議通訳の仕事…。

「好きこそものの上手なれ」といいますが、好きになったからこそ、中国語を生涯の友にすることができたのだと思います。

工欲善其事必先利其器

半世紀前の語学学習環境

私が神戸市外国語大学の前身『神戸市外事専門学校』中国語科を卒業したのは 1951 年であった。語学の学習はもっぱら教科書・辞書・教室での講義と反復演習・暗記であった。現在の学習方法もその基本は変わっていないと考える。ただ、科学技術の進歩とともに、学習方法も進歩しつつある。後進者の学習を補助するのが先輩・教員の役割であり、それぞれが自分の経験に基づいて早く・効率的に学習効果のあがる方法を工夫している。

オープンリール方式のテレコ

卒業後数年した 1955 年前後であったと思うが、母校神戸市外国語大学に LSI 教室ができた。テープレコーダーを使って模範的発音を何度でも繰り返して聞ける夢のような外国語学習方式が提案された。(当時は、夜遅く短波ラジオで北京放送を聞くのが本場の模範的中国語と接触する唯一の手段であった)



何故それ程まで道具にこだわる

飢餓感を持ったことのある人間の反動とでもいえるだろう、今の平和な物のあふれている時代の若者には想像もつかないことだろうが、戦時中に勤労働員を強いられて勉強したくても出来なかった経験を持つ私にとって、復学できたことが既に大きな喜びであったし、テープレコーダーやトランジスタラジオ、テレビが現れた時や、井上翠先生の書かれた中国語新辞典しかなかった時代から多くの出版社が発行する新しい辞書や学習書が手に入るようになった時、これを手に入れることが私にとって自分の中国語学習に対する飢餓感を癒す何よりもの薬であった。

コピー機や計算機そして PC の出現

その後、企業人になった私の前に新しい事務用品として PC や現在普及している乾式の普通紙用コピー機が現われたのは、確か 1970 年代の後半期であったと記憶している。当初コピー機はカーボン紙で複写したり、謄写版で印刷していた企業内印刷の手間労力を大幅に軽減し事務の効率化に役立った。PC も電子計算機の名の通り、当初は計算から始まったが、中国語でいう「電腦」の名の通り、単純な計算機器から各種の機能を備え進化してきている。今では、パソコンは現代人が自動車の運転をするのと同様に、誰でも使えるようになってきている。(事務所のインフラであり、現代人必須の道具でもある) 私への刺激は秘書がいなくなって、電話も自分でかけなければならなくなったこと、自分の書類は当然自分で保管し探さなければならなくなったこと、コピーもパソコンもそのうちに自分で

操作しなければならなくなるだろうという恐怖感からでもあった。

OAの光と影 ⇒ 危機管理をどうするか



文明の利器を使うと効率は上がる。でも使えなかったら??故障したら??この場合、巨大な落差が発生する……。ちょうど、事故で通勤電車がとまったり、普段通っている道路が通行止めになったり、家庭で使っているガスや電気・水道が使えなくなるのと同じであ

り、近代社会で当然備わっているべきインフラが整備されていない環境に身を置くなど、突然の環境変化にも対処可能な方法を考える必要がある。私の場合、このことは日本ではそれ程切実に感じなかったが、60年代初頭から中国への出張で、現地ホテルのエレベーターが動かなかったり、タクシーがこない、電話を掛けようとしてもつながらないなどの体験で感得させられたものである。

語学学習と教育の場での応用

現在 OA 機器は学校教育の場でも盛んに用いられるようになってきた。(教員も学生も⇒私が講師をしている某大学の場合、学生は入学と同時にノートパソコンが支給されている。)中国語の学習と教育の分野でもこれら OA 機器が普及している。OA 機材を利用する色々な教材も市販されている。それは主として旧来の紙媒体(=書籍)+電子媒体で、音声・映像がテープや CD になって提供されるようになった。ここではこれらに、少し手を加えて複合的に活用することを提案したい。(CCTV 等の録画画像とインターネットの活用を含めれば効果はさらに向上する)

“抛磚引玉”を期待して

今日は、現在私が試している学習方法をご披露した上で、参加者の皆さんからご意見を伺い、さらに効果的な活用につなげて頂きたいと考えている。但し、留意したいのは「知的所有権」の問題である。安易な流用やコピーが社会問題になっている。自己学習に役立てること、教育の場でも節度ある活用の範囲を超えてはならないことは言うまでも無い。

ビジネスプレゼンテーションの手法(西施^{ひそみ}の顰^{しん}に倣う)

①商品説明・企画の紹介・研究報告……企業社会ではプレゼンテーションソフト(演示軟件)による、取引先への訴求手法が盛んに行われている。語学学習者に対する訴求にもこの手法を用いてはどうかと考えた。

②また単機能商品に別の機能を加えたり、複合多機能商品が高付加価値や高付加効果を生んでいる。レトルト食品に少し手を加えることにより、大量生産された画一風味を自分の好みのお味に変えたり、栄養価を高めることができる。漢方薬でも民間の「単方」を製薬会社が「複方」にした薬効の高い薬が重宝されている。既存教材に少しだけ手を加えるこ

とにより、学習者に喜ばれ反復練習にも飽きのこない一味違った授業ができる。

③教材作成用使用器具は語学学習用の所謂三種の「神器」即ち下記であり：

処理内容	使用機材
音声処理	→音声レコーダ・テープ・CD・MD・ICレコーダ等とその記憶媒体
映像処理	→映像記録機材と記録媒体（カメラ・VTR/VCD・DVD）
文字処理	→パソコン+ワープロソフトなど及び各種記憶媒体

そして、これらの統合や加工にはパソコン+上記各素材の加工用ソフト（主としてパワーポイント）を使うことになる。

自作教材活用の現状と将来展開への期待

①作成した教材は、パワーポイントを使っているのでプロジェクターを使うのが最適だが、その為に特別教室を使ったり準備に時間がかかったりするのでは効果が期待できない。手軽な方法として現在学校の各教室には大体TVが常備されている。将来各教室にプロジェクターが設置されるまでの中間的手段として教室のTVを使う。手間は自分のノートパソコンとTVをつなぐだけである。プロジェクター用のスクリーンを準備する必要は無い。

②ビデオの動画を教材に利用する場合は、もし元の媒体がテープの場合は、是非DVDにダビング複製して活用したい。編集しておけば好きな場所で頭だしできるし、適宜一時停止させてもテープと違い画像は乱れない。PCによる文字情報と併用して、見て聞き理解する為の上級クラスの教材にも大いに活用できる。

反復練習にも飽きない教材作成

学習による実力作りは理解した上で応用し活用できることであるが、理解と応用活用が一挙に身につくことは神業でしかない。普通の人なら何度も繰り返して練習し・試行錯誤のうちに身につくものだと思う。従来から企業では一年間で経験することを三回繰り返して経験し三年目に一人前になるというのが普通で、この一人前になった社員がもう三回、即ち約10年業務を経験してベテラン社員、10年選手と言われるようになる。

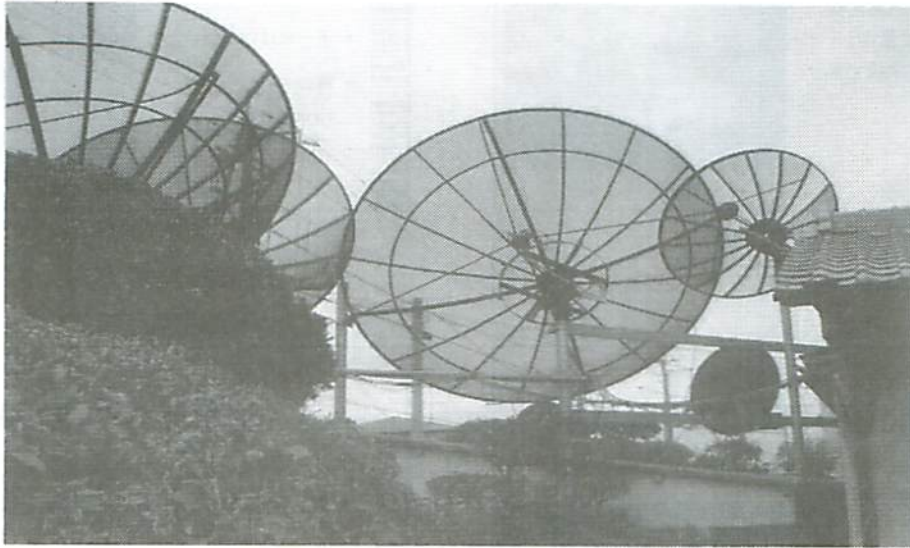
短期間に、集中力を保持しながら倦まず弛まず根気よく、さらに可能なら楽しく繰り返すことが、語学の学習には欠かせない。ただこれを一方的に学習者に要求するだけでなく、冒頭に述べたように教員側もどうすれば、その手助けができるかを工夫すべきで、私の試みがその一つの参考になればよいと考える。（学生のためだけではなく、教員自身のOA機器の操作習熟という自己研鑽にも役立つのではないか）最近の中国語用ワープロソフトには字体フォントを変えるだけでピンインつき文字が表示・印刷できたり、合成音声だが中国語の読み上げが可能になっている。学習者は楽しみながら学習できる。

こんな考え方をもとにひまに任せて作ったもの、未完成で試しているもの、お手軽加工教材の中の一部を見ていただきながら、私の考える反復演習と飽きのこない授業が実際にやれるかどうか、上述の効果をあげることができるかどうかを検討して頂きたい。パソコンでは簡単にコピーして幾通りにも加工し形を変えることができる。作るのに楽しく、講義

するにも、学ぶにも変化が満喫できる。(自画自賛と蛇足??)

功欲善其事、必先利其器

まず、私の自宅の庭に立てたパラボラアンテナと書斎を見て頂く。(アンテナは95年退職時設置、以後増設、現在五基、中国の中央電視台各チャネルは勿論、地方省市の番組も受像可能) 添付はデジカメで撮った写真を今回用に、プレゼンテーションソフトに移し込み、説明を加えただけのものです。一種の電子アルバムです。



【学習用の教材例】

以下添付別紙はすべてそれぞれの一部分のみ

文字もアニメ効果を使えば、「新式日中両文の紙芝居」が出来上がります。「大きなかぶ」「抜大萝卜」

以下幾つかの例示です、この**報告文**では、アニメ効果や音声が出ないのが残念です。

①画像をDVDに記録し、頭だしできるように編集加工したもの。反復練習に最適です。

(発音練習用) 右端枠のT&CはDVDのTitleとChapterを示す。(もと画像はビデオ)

(CCTVの天気予報⇒聞き取り練習) アナウンサーの話すスピードに圧倒されます。

(温家宝国务院総理の記者会見実況⇒聞き取り練習用/CCTVの録画と人民網より)

②パワーポイントで作ったファイルに中国語の**歌を流し込み**、歌唱指導という第二段階の発音練習教材としたもの。(賛美歌「清しこの夜など」)

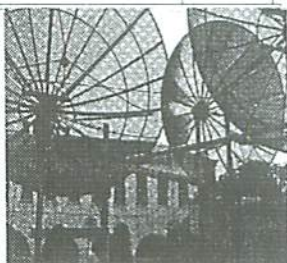
③パワーポイントの**アニメーション効果**で日中／中日の翻訳練習(サイト・トランスレーション他)に使おうとしたもの。音声が必要ならCD又はMDを併用する。

④OCR機材で文字入力の手力を省き、ビデオ又はDVDの画像と音声を、紙教材で確認しようとするもの。(音声入力機材を使っても省力化できる)

シナリオをOCR入力し文字ファイルにしました。(映画【宋家の三姉妹】“宋家王朝”と中国語の台詞)

功欲善其事，必先利其器

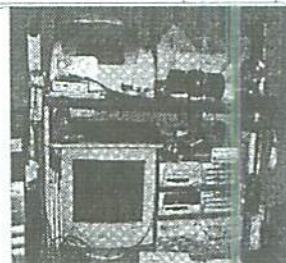
- 庭からパラボラアンテナの背面を見たもの。
- 左から直径3.6m・3m・3mの三本が見える。
- 庭の西側に集中。
- 向こう側は学校です。



1

功欲善其事，必先利其器

- 予備のPC
- 上二台はWindows
- 下一台はDOS機
- 隣のディスプレイはDOS機専用



2

功欲善其事，必先利其器

- 書斎一番の働きもの
- コピー
- プリンター
- ファックス
- スキャナー
- 複合機



3

大きなかぶ・拔大萝卜

- ♦ おじいさんが、かぶのたねを まきました。
- ♦ 爷爷在田里种了萝卜。

大きなかぶ・拔大萝卜

- ♦ 「あまい あまい かぶになれ。大きな 大きなかぶに なれ。」
- ♦ 每天给萝卜除草浇水时，爷爷总是叨念着：“快点儿长大，快点儿长大！成长成为又大又甜、又水零儿的大萝卜！”

大きなかぶ・拔大萝卜

- ♦ あまい あまい、大きな 大きな かぶに なりました。
- ♦ 在爷爷的精心抚育下，过了些日子以后，萝卜长大了。萝卜变得又大又甜、又水零儿。

大きなかぶ・拔大萝卜

- おじいさんが、かぶのたねを まきました。
- 爷爷在田里种了萝卜。

2004/7/9

大阪府立箕面専門学校

大きなかぶ・拔大萝卜

- 「あまい あまい かぶになれ。大きな 大きなかぶに なれ。」
- 每天给萝卜除草浇水时，爷爷总是叨念着：“快点儿长大，快点儿长大！成长成为又大又甜、又水零儿的大萝卜！”

2004/7/9

大阪府立箕面専門学校

大きなかぶ・拔大萝卜

- あまい あまい、大きな 大きな かぶに なりました。
- 在爷爷的精心抚育下，过了些日子以后，萝卜长大了。萝卜变得又大又甜、又水零儿。

2004/7/9

大阪府立箕面専門学校

大きなかぶ・拔大萝卜

- おじいさんは かぶをぬこうとしました。
- 该收萝卜的时候来了。爷爷想要拔萝卜。

2004/7/9

大阪府立箕面専門学校

大きなかぶ・拔大萝卜

- 「うんとこしょ、どっこいしょ。」けれども、かぶは ぬけません。
- “拔呀，拔！拔呀，拔！”萝卜拔不出来。

2004/7/9

大阪府立箕面専門学校

大きなかぶ・拔大萝卜

- おじいさんは、おばあさんを よんで きました。
- 没办法，爷爷叫来奶奶帮帮忙。

2004/7/9

大阪府立箕面専門学校

中文発音学習

内 容	テープカウント	T&C
発音 I	0:20	T1-1
1. 子音 b p m f d t n l g k h j q x	0:25	T1-2
2. 母音 a o e i u ü	2:35	T1-3
3. 声調 ā á ǎ à	3:30	T1-4
4. 軽声 āa áa ǎa àa	4:12	T1-5
5. 発音の比較 bo-po fa-hua ge-gu li-lü qi-qu	4:55	T1-6

発音 II	7:00	T1-8
1. 子音 zh ch sh r	7:06	T1-9
2. 母音 ai ei ao ou ia ie iao iou ua uo uai uei üe	7:55	T1-10
3. 声調の変化 (1) ǎā ǎá ǎà ǎa ǎǎ	10:01	T1-11
4. 声調の変化 (2) yì bēi (一杯) yì máo (一毛) yì kǒu (一口) yí kuài (一塊)	10:57	T1-12
5. 発音の比較 chī-qī shū-xiū rī-lǐ ao-ou-uo xié-xué	11:41	T1-13

第一課 去中国旅游

●A：听说最近去中国旅游的日本人特多，铃木先生，你也去了不少次了吧？

第一課 中国への観光旅行

●A：この頃中国へ観光旅行に行く日本人はとて多いようですね。鈴木さん、貴方も何回もいらっしゃってるのでしょうか。

第一課 去中国旅游

●B：哪里哪里，就去过一次。而且是跟旅游团去的，叫“北京、西安、上海七日游”。

第一課 中国への観光旅行

●B：とんでもない、一度だけです。それも観光団で行ったんです。「北京・西安・上海七日間の旅」というのでした。

第一課 去中国旅游

●A：去的地方挺多的嘛，既有名胜古迹，又有今日时尚。

第一課 中国への観光旅行

●A：行った場所とて多いじゃないですか。名所旧跡もあれば、今の流行りの場所もあるし。

天气预报(你能跟上她吗?)

观众朋友早上好!

欢迎您和我一起关注天气。

受冷空气的影响,今天西北地区东部,华北中北部东北地区的气温将会有所下降。并会出现四到六级的大风,同时我国中东地区将会出现大范围的降雨,预计今天白天到夜间,西北地区东部西藏南部有小到中雨雪,东北地区的中南部,华北中南部,黄海,江淮,汉水流域,江南大部,广西以及西南地区东部的部分地区会有小到中雨,其中辽宁的东南部以及长江中下游的部分地区会有大雨,局部地区有暴雨,并有短时雷雨大风或者是冰雹等强对流天气。北方的这些地区会有四到六级的偏北风,东部海区有五到七级的偏南风,好!一起来看一下具体的预报:

北京:阴转小雨,25到14度

深圳:多雨,31到25度

芜湖:中雨转雷阵雨,21到16度

巢湖:中雨,20到15度

长春:多雨转小雨

请大家继续观看中国各地的天气情况!!

国务院总理温家宝会见中外记者

[人民网现场记者]:十届全国人大二次会议闭幕后,温家宝总理将会见中外记者并回答记者提问。中央人民广播电台、中国国际广播电台、中央电视台将现场直播温家宝总理会见中外记者实况。人民网、新华网和中国网也将进行实时报道。这次记者招待会受到中外记者的极大关注。记者们早早抵达招待会现场,占据有利位置。

T3-01[主持人姜恩柱]:现在先请温总理讲几句话。

T3-02[温家宝]:女士们、先生们,下午好!非常高兴又同大家见面了!我首先要感谢广大群众,他们对两会非常关注,对我的政府工作报告非常关注,甚至对我举行这次记者招待会也非常关注。他们通过各种渠道向我提出许多问题、意见和建议,使我非常感动。

T3-03[温家宝]:我还要向关心中国建设事业的国际友人表示感谢,就在前不久,我收到美国勘萨斯州托尼克市的30多名中学生给我的来信,他们向我提出了54个问题,其中,包括有中国的政治、经济、文化、社会,也有关于我个人的生活和爱好。我喜欢吃什么食物,会不会武术,甚至穿多大号的鞋,他们确实把目光投向了我国。

T3-04[温家宝]:我还是想借这个机会回答群众的一个问题,以表示我对大家的敬意。一位朋友问我,你能不能用一两句诗来概括一下你今年和今后的工作。我想起两位伟人的诗,一位是毛泽东主席的“雄关漫道真如铁,而今迈步从头越”。一位是屈原的,“路漫漫其修远兮,吾将上下而求索”。谢谢大家。

T3-05[中央电视台记者]:总理您好。在去年的这个时候,非典疫情的肆虐让人们忧心忡忡,作为刚刚上任的新一届政府的总理,您所承担的压力是我们常人难以体会到的。那个时候,您常说,一个民族在灾难中失去的必将在民族的进步中获得补偿。

T3-06[中央电视台记者]:那么您如何评价过去的一年?另外您还说到一个民族在灾难中形成的凝聚力,定将推动民族的团结和进步,那么您认为今年我们在发展中面临的最重要的问题是什么?最困难的问题又是什么?谢谢您。

T3-07[温家宝]:过去的一年确实是很不寻常的一年,在党中央领导下,经过全国人民的努力,抗击非典取得重大胜利,经济社会发展取得显著成就,这些成绩来之不易。但是,成绩只是表明过去。我还要说,一个聪明的民族是一个善于学习的民族,特别是在困难中学习的民族。因此,重要的不是成绩,而是经验、教训和启示。

T3-08[温家宝]:对今年的工作,我始终保持清醒的头脑。安不忘危,治不忘乱,要有忧患意识,看到前进中存在着困难和问题,我们工作中最重要的是保持经济平稳、较快发展。最困难的是农业、农村、农民问题。最关心的是涉及群众利益的事情,最根本的是改革、创新和奋进。面对困难,我们有信心、有办法、有希望,一定能经受住新的考验,绝不辜负人民的希望。

T3-09[美国有线电视网记者]:您上一次访问美国期间,布什总统明确表示海峡两岸任何一方都不应该采取单边的行动,改变台海的现状,他也明确表示反对台湾将于下个星期举行的所谓“公投”,这个政策跟美国政府以往的政策稍有不同,您到底做了什么,让美国改变这样的政策?您拿什么“吓唬”了美国呢?为什么您认为美国方面或者是其他的外国在台湾问题上明确阐述立场对中国来说是重要的?是不是您认为,他们明确阐明了立场就会影响台湾将于下个星期举行的选举和公投的结果呢?

歌唱祖国

- ◆五星红旗，迎风飘扬，
胜利歌声多么响亮，歌
唱我们亲爱的祖国，从
今走向繁荣富强。

歌唱祖国1

- ◆越过高山，越过平原，
跨过奔腾的黄河长江，
宽广美丽的土地，是我
们亲爱的家乡，英雄
的人民，站起来了，我们
团结友爱坚强如钢。

《平安夜》①-1

- ◆平安夜，圣善夜，昏
暗中，光华射，
◆照着圣母也照着圣婴，
◆多少慈祥也多少天真，
静享天赐安眠，

《平安夜》①-2

- ◆平安夜，圣善夜，
天使唱哈利路亚，
◆哈利路亚！主降生，
主降生！

第一课 去中国旅游

- ◆A：听说最近去中国
旅游的日本人特多，
铃木先生，你也去了
不少次了吧？

第一課 中国への観光旅行

- ◆A：この頃中国へ観光旅行に行く
日本人はとても多いようです。鈴
木さん、貴方も何回もいらっしやっ
てるのでしょうか。

电影《宋家皇朝》台词

记者：宋庆龄的仆人来了……

记者：现在怎么样了？听说症状有所好转

警察：让开，不能进去！

领导：喂，马上发封急电，到华盛顿中国驻美大使馆。电文：蒋介石夫人宋美龄女士钧鉴，令姐孙中山夫人宋庆龄女士病重，急欲与君一见，诚恳希望在北京相聚。

职员：我在电报局四十多年工作，从来没听过给蒋介石那边发报……

宋美龄：连二姐也要离开了么？宋家难道就只剩我一个人了。

仆人：夫人，你是回去的吧？你们先替夫人打好行李，去呀，快去呀！

仆人：是！

话外音：不行，你这一去怎么能行呢？先总统一不高兴，不能跟共党打交道。

宋庆龄：阿忠，美龄回来了吗？

阿忠：还没有，夫人。不过，快了。我打听说，后天一班 001 航机，从美国转香港，直飞北京的头等舱，所有十八个位子，突然全都给包下来了。我想，这……

宋庆龄：那一定是美龄要回来了。

阿忠：夫人要水吧？

宋庆龄，宋美龄：再见……再见……

宋庆龄：从这个故事到哪个故事，有头没尾巴！

宋美龄：从二姐姐到小妹妹，有眼没有牙！

宋庆龄：瘦个子太瘦！

宋美龄：脸上皮肤也不够！

宋庆龄：张开嘴巴要闭眼睛！

宋美龄：张开眼睛要闭嘴巴！

宋霭龄：小灯笼，小尾巴。喂！

宋庆龄：大姐，你吓死人了！

宋霭龄：还玩！爸叫你们回去。

宋庆龄：回去干吗？

宋霭龄：游行呗！

宋美龄：什么叫游行？

宋庆龄：说游行啊，当然就是游戏啦。

宋美龄：好啊，快去，快去！

宋家姐妹：你拍一，我拍一……你拍二，我拍二……

众人：抗议美帝国主义！抗议侵犯中国主权！洋鬼子滚出中国！抗议美帝国主义！抗议侵犯中国主权！洋鬼子滚出中国！抗议美帝国主义！抗议侵犯中国主权！抗议美国！逼害华工！

宋父：打倒帝国主义，抵制洋货！快，把你们的玩具都烧掉！

宋美龄：不！为什么？

宋父：听我说，外国人对我们不好，我们不应该用他们的东西。小灯笼，你懂吗？

宋美龄：这个小公主是玩的，不是用的。

宋父：玩的就更应该烧掉，快去！

対中プラント輸出と投資についての若干の感想 中国繊維ビジネス断章

吉田鐵也 (2004. 6. 26)

まえがき

- 1、繊維事業の特質
 - ① 1次元--2次元--3次元
 - ② 長いリードタイム
 - ③ 部分構成の部品でない。
- 2、中国との繊維ビジネスモデル
 - ① 原料/織物/製品輸出入
 - ② プラント輸出/技術移転
 - ③ 合作/合併/独資（委託加工～国内市場参入）
- 3、プラント輸出/技術移転
 - ① 先進的技術
 - ② 詳細で正確な技術資料
- 4、投資に於ける先進性要求
ー外資企業法ー
- 5、技術移転について
 - ① 技術者養成訓練
 - ② Supervisor 派遣
 - ③ 性能確認運転
 - ④ 守秘義務/使用範囲/対外市場制限
- 6、工場建設投資
ー南通の考え方ー
- 7、中国の繊維事業
ーフルセットは機能するか？ー
- 8、四つの不変



まえがき

日中関係の今日までの歴史には、それぞれの時代に於いて多くの先達のそれこそ血と涙の物語があり、私が如き者が御話するのはおこがましい限りではありますが、たつての御要請と言う事で、恥を忍んでこの席に立たせて戴きます。

私は企業にあっては主として繊維事業に関わるビジネスに従事して来ました。その範囲は、国内外の紡績会社に対する繊維販売（原糸原綿販売）、織物生産企業に対する繊維販売（紡績糸・長繊維）販売、流通業者織物販売問屋に対する織物販売、所謂アパレル企業に対する織物販売から、繊維事業に関わるプラント輸出・投資・経営まででありました。

戦後 50 年、改革開放 20 年を経て、今新たな日中経済（貿易・投資）の発展の中で何を感じ何を考えさせられているかについて、中国ビジネスモデルの或る切り口からの感想を御話したいと想って居ます。

1、繊維事業の特質

最初に御話して置きたい事があります。既に御承知ではありましようが、繊維ビジネスには他のビジネスと決定的に異なる一大特質が有るのです。それは次の 3 点であります。

①繊維は「商品」として生産され流通し最終消費されて行く過程の中で、繊維の「商品」としての価値（価格）表示の「単位」が変わって行くと言う事。即ち、繊維の糸・綿のビジネスは重量即ち kg 当たり幾らで売買される。それが織物になると面積即ち m² 当たり幾らで取引され、2 次製品即ちアパレルとなると 1 着（1 打）当たり幾らと言う単位で売買取引されるという事。（ 1 次元《重量》－ 2 次元《面積》－ 3 次元《個》 ）

②繊維はその出発点の形態が細くて長いものであるが故に、原料（糸・綿）の生産から最終消費される製品（縫製品）までのリードタイムが極めて長い事。

{75de 一本 3kg の bobbin の糸の長さは 360km。かつて豊田自動車と或る車種のカーシートを企画した時、そのリードタイムの長さに驚嘆された事がある。（使用糸の生産・その糸による織物生産・織物の染色加工・カーシートに縫製までのプロセス所用時間）}

③繊維は原材料から最終製品までのプロセスが部品の組立加工プロセスによって完成して行くのではなく、第 1 ステージの原材料（ファイバー）がそれ自身のファッション性を包含して第 2 ステージの織物（ファブリック）を構成し、その第 2 ステージの織物（ファブリック）が同じくまた新たに付加されたファッション性を包含して第 3 ステージのアパレル製品を構成する事。即ち、ファイバーもファブリックも最終企画商品のアパレルに対して交換可能な部分を構成する部品部材ではなく、アパレルそのものとしての価値を構成する素材であると共に当該アパレルファッションの構成要素である事。この最終製品（アパレル）までのリードタイムの長さが繊維産業の QR 機動力を有効ならしめ難い決定的要因となっている事。

長々と繊維ビジネスの特質について御話して来ましたが、それは日中間の繊維ビジネスを論ずる時、最初に明確にして置かなければならない基本的認識であるからであります。

2、中国との繊維ビジネスモデル

さて、中国との繊維ビジネスモデルの流れを大雑把に追って見ると、大体次の様であると言えます。

- (1) 製品・商品の輸出入
- (2) プラント輸出/技術移転
- (3) 合作・合併・独資
 - ① 委託加工生産志向～②国内市場参入志向

私が中国相手に直接取組み推進した範囲は、先に述べた第 1 ステージの原料ポリマー生産から原糸原綿生産までのプロジェクトと第 2 ステージの糸を使用して織物を造り染色加工するプロジェクトであり、所謂第 3 ステージのアパレル（縫製～販売）プロジェクトについては直接の経験はありません。

〔所属していた会社としては、勿論アパレル分野の事業も展開はして居りましたし、今も事業として 100%子会社での展開をしているのですが…。〕

3、プラント輸出/技術輸出について

私は、1973 年～1976 年～1981 年、周恩来総理が「建議」し毛沢東主席自らが「圈定」した 4 大合織プロジェクト、上海石化・天津石化・遼陽石化・四川維尼綸廠の中の上海と天津のプロジェクトに、ポリエステルのプラント輸出/技術輸出というビジネスで参画しました。正に文革が「批林批孔」を喚き、最後の熾烈な指導権争奪戦を展開していた激動の終末期から改革開放への 8 年でありましたが、この間の経験の中から今日改めて考え置くべき事、現下のまた今後の日中ビジネスに於いて心すべき幾つかを抽出して見たいと思います。

① 先進的技術

技術輸出・プラント輸出に於ける契約には必ず下記条項が条文として規定されました。

提供する技術は最も先進的であり、実際経験のあるものであり、最も信頼性のある技術でなければならない。《乙方提供的技术应是最先进的，有实际经验的，最可靠的。》

従来、西側の世界では技術のライセンスビジネスは技術を所有している licensor が主導権を持ち、licensee が主導権を持って交渉出来る事は有りませんでした。改革開放までの中国は国家の独占的技術導入機構（中国技术进出口总公司）で以って licensor に対峙して

来た事により、世界の各 licensor を熾烈に競争させる事を可能にし、上記条文による技術導入原則を堅持し得たのであります。

かかる「最も先進的」と言った文言での契約条文は、欧米の近代的ビジネス契約の通念には無い極めて文学的表現であり、私達は大いに戸惑ったものであります。この原則は中国の過去の歴史的経験に拠って来るものであると同時に、典型的な中国独特のビジネス手法に基づく主張であり、正に俗話の《不怕不识货，就怕货比货。》そのものであったのであります。当然に、契約後の具体的契約実施段階に於いて、多くの問題が発生しました。

当時の中国側の基本態度は

- ・ 既存の材質 (spec) を如何に level-up させるか。
- ・ 実験中の新技術を如何に取り込み guarantee させるか。
- ・ 「手動」はすべからく「落后的」と看做し、「自動化」を推進拡大する。

でありました。

{1973 年当時、私が北京で読んだ中国の化学繊維の書籍 (B5 200 ページ程度の化学繊維技術書) に、クラレは北京维尼纶厂に陳腐な技術を高価な価格で売りつけたと強く批難した記述を見た。私はこれは単に文革時の限られた agitator による過激な排外発言であったとは見ない。契約に規定する「先進的技術」の解釈が異なるのである。}

「技術導入投資」は経済行為として、「どれだけのカネを使ってどれだけの成果を得るか？」を中長期的経営判断 (=意思) によって決定して行くべきものでありますが、中国はこの純粹に「コストと成果」の経営的経済分析・判断をするに当たり他の国には例を見ない多くの時間を費やして来たと言えると想います。

②詳細で正確な技術資料

プラント導入の設備に関し、最も紛糾したのは供給設備に関する提供技術資料であります。設備取扱説明書・設備据付説明書・設備保全説明書以外に、中国が常に入手を志向したのは設備製作図面であります。当然にそれ等は契約範囲外であるとして紛糾しましたが、中国側は《技术资料应是正确的，详细的，可靠的。》の契約正文条項の《详细的》を盾に執拗に形を変えて次々と要求を繰り返し、攻防戦は時に「熬夜洽谈」を余儀無くさせられたものであります。当時の日中技術者の基礎レベルの格差が説明書と製作図の認識の差となっているのだとの解釈の議論も致しましたが、私は基本的に自力製造能力の獲得を戦略としていた事は間違いのない事実だと想います。外国の力 (資本と技術) を用いて如何に中国の機械設備製造能力 (レベル) を高めて行くかを志向していて、今日の国家プロジェクトの展開推進に於いても如実にそれが現れてると考えます。

{三峡ダムプロジェクトに於いてその基本的海外設備技術の導入を大きく 3 つに分け、最初の 3 分の 1 は設備を海外から調達するが、次の 3 分の 1 は合併で中国にて製作し、そ

して残りの 3 分の 1 は中国自身で製作するとの枠組みに同意する事をプロジェクト参入の条件としている。}

4、投資（合併・独資・合作）に於ける先進性要求

中国に持ち込む技術は「先進的技術」でなければならない事についての拘泥は、合併事業・独資事業・合作展開に関しても変わりません。それは外資企業の基本法である外資事業認可法にも明記されているのです。

即ち、

（1）中華人民共和国中外合資経営企業法第 5 条規定

外国合营者作为投资的技术和设备，必须确实是适合我国需要的先进技术和设备。如果有意落后的技术和设备进行欺骗，造成损失的，应赔偿损失。

また、同实施条例第 6 章「引進技術」第 44 条規定

合营企业引进的技术应是适用的、先进的，使其产品在具有显著的社会经济效益或在国际市场上具有竞争能力。

（2）中華人民共和国外資企業法第 3 条規定

设立外资企业，必须有利于中国国民经济的发展，并且采用先进的技术和设备，或者产品全部出口或者大部分出口。

（3）中華人民共和国合作経営企業法第 4 条規定

国家鼓励举办产品出口的或者技术先进的生产型合作企业。

導入技術は先進的でなければならない事、これは中華人民共和国建国以来、一貫して党中央が要求し堅持して来た技術と言うものに対する中国の原則であり、不動不変の戦略的希求なのであります。そして「先進的である事」の要求は、単にビジネスに関わる分野に留まらず、党の identity・国家戦略の基本とまで位置付けられて来ています。即ち新しく中国共産党党則に盛られた所謂「三つの代表」の中に《党は中国の先進的な生産力発展の要求の代表であり、先進的な文化の発展方向の代表でなければならない。》と謳っています。《我们党要始终代表中国先进生产力的发展要求，…，我们党要始终代表中国先进文化的前进方向，…，》

{なお、改革開放の初期に日本繊維構造改善プロジェクト推進の中で、数百台の中古の仮燃機を対中輸出した事があります。これは技術導入とは関係の無い、純粹に格安機械設備購入ビジネスとして認識され成立したものであります。}

《アメリカと言う国》

{1976 年、天津での繊維原料ポリエステル 8 万トン重合プラント（当時世界最大）のときであったが、コンピューター自動制御システムは COCOM/CHINCOM 巴黎统筹委員会（禁运

貨単) / 対華出口管理委員会 (対華禁運貨単) の禁輸リスト品目であった。当該プロセスは世界一般ではマニュアル自動操作システムが採用されていた。理由は当時の実生産に於いてはマニュアル自動操作システムの方がより経済合理性を持って居たからである。中国はコンピューター制御システムの導入を強く希望し、結局或る一定の付帯条件付での契約調印となった。契約調印後、日本通産省を通じパリの本部に申請し種々工作したが一向に埒が明かず、1 年が経過した。終に当該プラント機器製造開始のタイムリミットとなる或る日、北京にて通産省からの通報として COCOM 認可取得の電報を受けた。快哉を叫んだのだが、翌日の新聞を見てがっかりさせられた。アメリカ IBM が COCOM/CHINCOM の承認の下、人口調査用に大型コンピューターの対中国輸出に契約調印したとの発表である。如何に米国のビジネスが政官財一体の強力な行動によって展開されているかをまざまざと見せつけられたものである。}

《新幹線 (上海～北京) 売り込みについて》

{北京 - 上海新幹線プロジェクトについても導入の基本路線は同じであると考えべきでありましょう。30 数年の安全運転の実績は中国には決して「先進的」とは映らない。中国が要求する「先進的な」ものとは、その安全性の上に、更に新しい挑戦のリスクを包含したもの、即ち研究開発段階を終え先行実験先行実施に入っている技術を包含するものであり、それを guarantee して提供させる事。不測の事態の発生に対しては、全力を挙げた問題の徹底的解決と関連する経済的補償を約束させて置く事であり、それが中国の原則としての技術導入の面子であり、中国の世界観としての友好的取引関係なのである。

『原則が確認されれば、現実には発生する問題に対しては、(勿論具体的個々に於いて激論と駆け引きが戦わされるが、) 最終的には現実主義的「实事求是」によって決着して行く。』これが私の経験して来た中国である。}

5、技術移転について

①技術者養成訓練 (培训) について

プラント輸出に伴う技術移転契約は、当然にその当該技術の使用範囲は「契約工場」に於いてだけでありました。契約履行実施の一環として、「契約工場」の建設操業の為に中国技術者の養成訓練があり、当然にこれら養成訓練に参加した中国人技術者は全員「契約工場」にて日本人技術者の下で建設操業に参画する契約でありました。しかし帰国後何人かの技術者は最後まで契約工場には顔を出さず、この予定していた現場での中国人技術者の欠落は日本人 supervisor に過酷な負担を強いるものでありました。またそれは単に契約工場の立上げを困難にただけで無く、当該契約技術の契約工場以外での使用を疑わせるものでもありましたが、この問題に対しては中国側は終始無回答でありました。

② supervisor 派遣について

文革下、過酷な条件下での仕事と激論の絶えない日々であったにも関わらず、25 年を超

えて今日なお私達の技術者と一緒に仕事をした上海の技術者・天津の技術者との個人的友情の付き合いがあります。この事実は今日の私の対中国観を構成する基本的検証の一部でもあります。

③ 性能確認運転について

プラント契約/技術移転の契約履行の最終点である性能確認運転《考核运转》に対する基本認識は、日本と欧米とでは大いに異なっていました。契約に対する基本理念が違うのです。契約に定められた通り、若し性能確認運転に於いて不合格となった場合は penalty を払えばいいと言うのが契約に対する欧米の基本認識であり、日本人のそれは不合格とか penalty 支払いと言う事態の招来は有り得るべきものではないと言うものでありました。最終的結果として、如何に私達が中国の信頼を勝ち得たかはその後の歴史が証明するところでありますが、常にプラント輸出ビジネスの競争に於ける大きな論点でありました。

④ 導入技術の守秘義務・使用範囲・製品の対外市場制限について

パリ条約に加盟していない社会主義のそれも文革当時の中国とのこれらの問題に関する交渉は、legal にはっきり規定する事は出来なかった。違反に対する査察権の保証もなく、交渉は異次元の世界との議論に多くの時間を費やした。私達の日中友好の帰着点は保証/penalty の無い「契約工場」の「守秘義務」遵守の契約条文と問題発生時に於ける「友好協議による解決」でありました。

{この議論の過程での中国の経験は、1983年9月20日国务院发布《中华人民共和国中外合资企业法实施条例第6章引进技术第43条---第46条》に中国の不変の要求として引き継がれている。}

— 不可抗力について —

{今日では笑い話であるが、当時「罢工」は不可抗力ではない、だから契約の不可抗力規定に入れる事は出来ないと中国側が主張し、延々数時間を費やした事がある。}

6、工場建設投資（改革開放）

92年に入り歴史は更なる改革開放加速の時代となって来ました。社会主義市場経済を標榜して舞台が大きく廻り出したのです。「社会主義市場経済」とは如何なる経済理論か？中国の志向する経済体制は如何なるものか？多くの論者によって論じられましたし、また論じられています。私はそもそも中国に「社会主義市場経済理論」が先に存在し、それを実践して行こうとしたのではなく、経済的に遅れた当の中国が NIES や ASEAN 諸国から「資本と技術」こそが国家発展の原動力である事を学び、この「資本と技術」を如何に外資から調達するか？遅ればせながら「改革開放」がその「資本と技術」を導入する事が出来る唯一の残された選択肢だと気付いての大転換を決意したのであり、その決意の後でその決意の正当性を求める理論として模索した言葉が「社会主義市場経済」だと分析して居ます。

南通帝人の考え方

対中国建設投資については次の様な枠組みでスタートしました。

- (1) (当時の中国の政治経済の実態から、) 小さく生んで大きく育てる事とする。
- (2) 中国進出日系アパレル企業へのファブリックの QR 対応を第一とする。
- (3) (独資でなければ事業経営の自己責任が持てない。) 独資的経営を徹底追求する。
- (4) partner には日本側の不案内な部分を cover する事だけを期待する。
- (5) 不良債権の発生を未然に防ぐ。

日本に於ける最新の技術で以って、1994 年裏地専門の「染色加工」の工場を建設し、その後逐次「織布」「裏地以外の品目」へと増設し今日を迎えて居ります。

7、中国の繊維事業

さて、繊維事業は第 1 ステージであれ第 2 ステージであれ、また第 3 ステージであれ、その事業コンセプトを何処に置くか？例えば、少品種大量生産或いは多品種少量生産の何れを目指して行くか？等それはそれぞれの国の事情、それぞれの企業の global な事業戦略に拠って変わるのは当然の事であります。では中国はどうか？中国は既に述べました繊維の第 1 ステージ・第 2 ステージ・第 3 ステージそれぞれのステージに於いて各企業（国営・公営・私営・合弁・独資）が個々に多様な展開をして居り、今日中国全体を合計して見ればその生産の圧倒的 volume に於いて世界を凌駕席捲して居るのであります。

しかし、中国がこの原料からアパレルまでの不連続なステージ、第 1 ステージから特に売れ残れば「半値 8 掛け 5 割引き」《半价八折五扣》と言われる第 2・第 3 ステージを包含しての繊維産業に於いて、何処まで中国自身の企画商品展開の商取引の vitality (活力) が機能し得るか？それが問題であります。例えば、

90 年代に入り、紡織総会傘下の国有合繊企業の買収要請があり、具体的に幾つかの交渉を持ちましたが、どの企業も各ステージの B/S・P/L が明確でなく実現しませんでした。

また一方、こんな例もあります。

翔鹭涤纶纺纤(厦门)有限公司の短繊維綿混用 1 銘柄 10 万トン/年、長繊維 POY1 銘柄 10 万トン/年と言った展開が出来るのは、全世界でも中国に於ける外資だけであります。

合弁/独資を含む中国の原糸原綿/紡織染/アパレルの大中小の各企業が、どんな戦略で以って今後の展開を図るか？これ程興味深いものは有りません。

繊維の生産と研究開発との関係はそのリードタイムとリスクを包含して各ステージに跨り大きく 2 つに分かれます。

- (1) 「どういったポリマーからどういった繊維を造り、どういった織編物を造るか？」

《基礎技術・応用技術の研究開発とその生産》

(2)「開発された繊維で①いつ②どれだけ③どういった企画デザインの織編物を造り、④いつ⑤どれだけ⑥どういった企画デザインのアパレルを造るか？」

資本集約的-----労働集約的

ファイバー	ファブリック	アパレル
ファイバー	ファブリック	ファブリック
		アパレル

これら各ステージでのビジネスはまた次の概念の座標軸の何処かを占めて自らの商品群を構成して居ます。



8、四つの不変《四个不变》

建国から 30 年、改革開放から 20 年、WTO 加盟から 2 年半、この間に大きく変わって来た事と、全く変わらずに一貫した不変の主張があります。

それは「四つの不変」即ち、

- (1) 共産党独裁の不変-人事/党則は変わっても党の権力独裁は不変-
- (2) 中華思想の不変-プライドの堅持/国家利益追求の不変-
- (3) 導入技術の先進性追求の不変
- (4) 原則不動不変の不変-対応は現実主義の不変-

であります。

先日 (2004 年 6 月 1 日) 発表された中国の自動車産業新政策に於いてもこの従来の基本原則「四つの不変」を変えるものではないと私は想っています。

最近特に注目すべきは、ここ 2~3 年、所謂製造部門だけでなく研究開発に関わる部門の現地中国展開が多く、事業分野で発表されています。特に私の専門でない field で顕著であります。

〔家電〕

AV（音響・映像）機器用ソフトウェア研究拠点（ソニー・松下電器）2001. 12. 13<日経>
白物家電研究開発機能の一部を中国シフト（日立・他）

複写機開発（キャノン・リコー・富士ゼロックス）2001. 12. 29<日経>

〔二輪車〕

（ヤマハ・ホンダ）2002. 2. 4<日経>地域ごとにデザインや機能などについての好み異なるなど多様化に対応を迫られている。

いずれもマーケット志向の商品開発の為としての組織戦略の現われであります。しかし留意し置くべきは、その開発が自らの投資工場乃至は己が経営の企業の生産販売にリンクした枠組みが堅固に構築されていない限り、将来大きな問題を惹起すると考えて居ます。単に高級労働集約事業として安価な労働力を求め、真にその事業を支える経営基盤が何処にあるかを見失うとすれば、いずれそこに従事する中国側に主導権は移行するの止む無きに至る事は必定でありましょう。

私の中国ビジネスとビジネス中国語

2004年6月26日

東浦 正重

「機械製品の売り込み、技術交流、技術
ネゴ、商談、出荷、据付試運転からクレ
ーム解決まで、30年間の色々な経験をお話し、
今後機械貿易に携わる方の参考になれば幸
いです。



1. 略歴

1966年 大阪外国語大学 中国語科卒業後、当時の友好商社呉山貿易に入社。

1967年 春季交易会より毎年交易会参加。

1970年 北京に滞在し、パルプ、計測器関係の貿易商談に本格的に参加。

その後、機械輸出専門に担当。

1978年 京都の紡績会社、吉村紡績株式会社 貿易部に転職。

吉村孫三郎会長が日本国際貿易促進協会京都総局の会長で、嵐山の周総理、記念詩碑建立の呼びかけ人代表であった関係から、嵐山で多くの中国の国家指導者にお会いする機会に恵まれる。また、会長に同行して北京訪問し、鄧穎超女史とも会うことができ、通訳は、「日中の架け橋である」とであると激励される。

改革開放のおかげで、機械貿易もずっとやりやすくなり、ユーザーを訪問する機会も多くなる。プラスチック機械、繊維機械中心に売り込み。

1994年 機械専門メーカー三菱重工業株式会社 冷凍機製造部門に、翻訳通訳専門要員として、再就職。技術資料の翻訳、工場立会い、訪中技術者の同行通訳その他中国との連絡業務、営業補助業務に従事。

その後、2年間のブランクをおいて、現在は、協力会社の社員として同様の仕事に従事。

2. 現在の仕事内容

製品概況

冷凍機とは

工場、大型建造物、大規模ビルなどの冷房用の冷水を作る機械。

この水で冷風をつくり、各部屋に送る、或いは冷水を部屋の天井、

或いは壁際まで送り、冷風に変えて各部屋に送る。

冷凍機の種類

- 1) スクリュー式冷凍機：スクリューの空間で冷媒のフロンを圧縮してフロンを蒸発により冷水を作る。中小型のビルなどの冷房に使用される。
- 2) 吸収式冷凍機： 真空の中で、水を蒸発させて、管の中の水を冷やす。臭化リチウムという水をよく吸い込む液体に水蒸気を吸い込ませて、又、蒸気、ガス、油で加熱して、臭化リチウムと水を分離して、繰り返して、冷水を作る。ビル、工場、大型建造物など。
例： 関西空港、上海証券取引所ビル
- 3) ターボ冷凍機： ターボ式圧縮機で冷媒のフロンを圧縮して、フロンを蒸発により冷水を作る。 工場、大型建造物、地域冷暖房
例： 新しい広州交易会場（広州国際会議展覽センター）
三菱重工では、主にターボ冷凍機と吸収冷凍機を製造しているので、その関係の中国語に関する業務と営業補助。

3. 取引の経験から思いつくこと

1) 売り込み

改革開放までは、ほとんどカタログによる宣伝、及び見本市。特別に技術必要な場合、招請を受けて技術交流して売り込み。

カタログを色々集め、カタログを貿易窓口にする、届ける、何とかアポイントを取って口頭で宣伝。カタログは、新しい引き合いを取る一つの手段。

改革開放後は、次第に移動も自由になり、ユーザーに直接アポイントを取り、カタログを持参説明。

例として、長沙で駅の看板を見て、ユーザーの存在を知り、魚網機を売り込みに成功。その後、別のユーザーからも注文あり。

現在は、入札制度になっているが、やはり第一にユーザーに製品を認識してもらい、入札募集の技術要求書類（仕様）を作成する手伝いをする程度にもっていき必要あり。その際、自社の仕様の一部を入れさせることができれば、落札したも同じ。

2) 技術交流

自社製品の特長をいかに説明するか、又、競合他社との比較表を作成し、自社の製品がすぐれているか強調する。この比較表は重要。

又、質問にはできるだけ丁寧に回答し、生産技術に属することは、言えなくても、製品の優れた点を強調できる点は、会社で許されるぎりぎりまで説明し、信頼を勝ち取る。要は自分の製品に対するファンをどれだけ作れるかにある。日本派、欧州派、アメリカ派などが必ずいる。技術交流していて、誰が技術のキーマンか見極め、その人の信頼を得る。

3) 技術ネゴ

徹底した討論をして、決めたことはかならず覚書に残す。その際、覚書、会談紀要の原稿はかならず自分で書くようにする。主導権をとること。ある程度のフォームがあるので、それにのっとり、事実のみを記入するようにする。中国側が書いた文章に手を加えるのは難しい。

特に、供給範囲を明確にして、含まれるものと、含まれないものは明確に記入しておく。能力がどこまで出るか、能力をどのように測定し、検収するかについては、必ず取り決めておく。

文章表現には、こだわること。一つのことばの解釈めぐり、2時間、3時間かけて討論し、作成していくぐらいの粘りが必要。あいまいなことをしておくと後で苦勞する。

4) 出荷

機械の外観、中国の人にとっては大切な買い物。機械の外観、特に雑な溶接ビード及びその後処理、鋳物の表面処理、ペンキの塗り方などで、文句言うケースが多い。こんなことから、感情のもつれで、検収がうまくいかないケースが多々あり。

梱包、何十年経っても、機械を雨ざらしにしたりするケースがまだまだあり、梱包は最新の注意を払う必要あり。トタンで天井を覆うなど。

さびた場合、損害を中国側が負担するケースはないと考えるべき。海事検定協会に頼み出荷時の証明書を取って相手に送りつけておく。

5) 調整試運転

作業の予定表を提示し、それまでに準備すべきことを列挙しておく。

又、出発の最後の最後まで、現地の状況を把握し、行って無駄な時間を過ごすことのないようにする。

その日、その日の予定を中国側と打ち合わせし、効率よく、主導権をとって仕事を進める。

長年、調整試運転せず、放置して、部品をさびさせた例、及びその裁判の判例紹介。<http://www.ccmt.org.cn/ss/writ/judgementDetail.php?sId=1061>

6) クレーム処理

能力が出ないクレームに対しては、相手が「返品だ。」と声高に要求してくる。実際問題、返品できないし、自分たちもその機械を使って早く生産したいが、交渉術として、「返品」を要求する。交渉を重ねて、部品の無償提供で解決可能か、又、何パーセントかの値引きで解決できるか見極めて、解決案を模索していく。解決の同意書も主導権をとり、こちらが文案を作る。すべての文章は作る方が作成する方が有利となる。

7) プロジェクトマネージャーの設置

会社により、部門間の調整役がどうしても必要になる。

特に中国との調整、社内の各部門との調整など、プロジェクトごとに気をくばっている人が必要。営業部隊では、それができない。

4. 翻訳/通訳上での経験

1) 誤訳

必ず誤訳している可能性があるので、内容が分かる人に再チェックしてもらう。

(他人の誤訳例： シールするパッキングを 梱包のパッキングと誤解して訳していた。腐れ代（くされしろ）、保冷代などの代は、しろであり、洗濯代などの代とは、違う、これを料金の意味で誤訳している。

特に、来日した中国の人に翻訳を頼んだ場合、こういった誤解がある。逆を我々もやっていると思う。

堆高機 台湾では、フォークリフトのこと。大陸では、堆高とは、溶接でいう余盛のことで、余盛機と訳してしまった。台湾のヤフーで調べるとすぐに分かったはず。台湾の表現と大陸の表現で違いがある場合が多い。

2) 原稿ミスによる誤訳例

技術者の原稿にミスタイプがある場合、特に最近ではワープロ変換ミスによる間違いがある場合あり。おかしいと思われる文章は依頼主に積極的に問い合わせする。技術者には、面倒がられるかもしれぬが、それにより大きなミスを防げるかも。

逆にミスでない場合が多い。

Re-1/8 テーパーねじの表現 Rs-1/4 平行ねじの表現

3) 自分の辞書の準備

専門用語も辞書だけでなく、現地で収集した生きた言葉を中心に集めていく。

(例：修補)

実物で、現地の人たちが何と言っているかを把握し、今後の通信等に生かす。この努力により、誤解を生じないようにする。

その業界で一般的に使用されている専門用語を使用するよう心がける。

業界他社のカタログ集めて、研究。最近では、インターネットのホームページから、カタログ収集。

専門用語の意味の学習

日本語の場合、各メーカーのホームページによって、用語解説をしている場合が多い。

例 <http://www.fujielectric.co.jp/chi/fdt/scd/index.html> 富士電機半導体

http://wwwf2.mitsubishielectric.co.jp/melfansweb/inv/details/yogo/yogo_key.htm 三菱電機 用語解説

これなどを見ながら、学習を進める。

又日本工業標準調査会（JIS）のホームページ <http://www.jisc.go.jp/> から用語解説を閲覧する。このホームページでは、閲覧のみしかできないが、勉強にはなる。

中国のホームページにも、述語を解説しているメーカーがあり、それにより、中国語の意味を理解する。

4) 意識と直訳

技術的には、よくわからない文章については、直訳主義でいく。技術者の文章は、難解な言い回しが多い。作者は、誤解をうけぬよう書いているので、それを素人が勝手に解釈して、誤解を与えぬようにしたい。

例。 日本語原文 ユーザーに保全管理事項を提出する。

私の訳 給客户提供保養管理事項。

代理店の訳 向客户要求進行維修保養。

作者は、管理する項目を一つ一つ提示して、保全管理をお願いしてくれとの意向である。しかし 代理店の訳では、保全管理しておいくださいねと要求するだけで、どんな項目を保全してくださいと言う意味とはなっていない。

5) 正確に訳す。 例、大於 小於 等於

英語の書類には、中国語の訳をつけよ。もし意味の違いが生じた場合、中国語を採用すると契約書に書かれている場合あり。正確な翻訳が求められる。

5. 翻訳していて気になる言葉

- 1) 工藝 一般的にプロセスと字引には載っているが、そのような意味でつかわれている場合と、「生産技術」の意味で使用されている場合があり、全体のながれで使い分ける必要がある。
- 2) 承諾 最近特によくこの言葉が使用されだして、機械貿易では、アフターサービスについての「承諾」というような場合、約束或いは、誓約と訳さないと意味が通らない。
最近ビジネス上で使われている意味は、非常に重い。その約束を破った場合、それ相当の責任を持ちますの意味があると考え。日本語のたんなる承諾しましたの意味ではないと思う。
- 3) 簽収 中国側に書類、物品を渡した場合、必ず、受け取ったという書類を取っておく必要がある。直接の担当が不在で、代わりに受け取ってもらう場合など、必ずインボイスなどを作成して、「簽収」してもらっておく。これは、後で起きうるトラブルを防げる。
- 4) 機組 冷凍機を中国語では、制冷機と訳す場合と制冷機組と訳す場合があります。中国は、本体だけでなく、起動盤や制御盤なども含めて一つのユニットと

考えているので、機組という言葉を使用するようで、日本語に訳す場合、機械ユニットと丁寧に訳す必要がない場合もある。

- 5) **備案** これは、ただ書類を役所に送り、記録として保管してもらっただけで、承認を得るとか、その他の意味はまったくない。
- 6) **環節** ポイント、部分と訳されるようだが、機械関係では、もっと適当な訳語がないかと思う。
- 7) **專項** 伊地知辞書では、特定項目、特別プロジェクトと訳されているがもっと他の意味で使われている場合があるように思われる。
- 8) **論証** 現代漢語詞典では、論述並証明となっている。ビジネス関係では、そのプロジェクトをいろいろな人が集まって、議論討論し、研究することを言う場合が多い。まだ「論証の段階である」などと言われる。
- 9) **標準** 日本工業規格の規格という意味で使われる。
- 10) **規格** 日本語では、仕様と訳す。台湾では、規範で仕様の意味の場合あり。大陸でも、規範を使う場合あり。
- 11) **平台** コンピューターで使う場合が多く、プラットフォームと訳すようだが、その他の文章でも最近よく見かける。今後、研究必要。
板金加工の言葉などでは 定盤（じょうばん）のことを平台と言う。
- 12) **協調** 歩調をあわせる。調整するという意味ですが、特に機械納入後の据付会社、施主との「協調」を十分にやるようになどとよく見かける。
- 13) **系統** システムと一般的に訳しておけばよいようにも思うが、冷凍機などでは、「冷水系統」、「冷却水系統」などの場合、システムと訳すとおかしくなる。
- 14) **歸口** 窓口となるということで、中国の国家規格などを訳していると、よく出てくる。

まだまだ辞書には、載っていないで、訳するのに困ったと言う言葉がたくさんあると思います。これらの言葉を交流しあってお互いに向上していきたいと思っています。

現在使用しています、冷凍機業界の専門用語を別添の資料にまとめましたので、参考にしていただきたいと思います。

以上

日中冷凍機関係用語集

	日本語	中国語	備考
1	冷凍機	制冷机 制冷机组 冷水机组	冷冻机でも可
2	吸収冷凍機	吸收式制冷机组	
3	蒸気式吸収冷凍機	蒸汽式制冷机组	
4	直燃式吸収冷凍機	直燃式制冷机组	
5	スクルー式冷凍機	螺杆式制冷机组	
6	臭化リチウム冷凍機	溴化锂制冷机组	
7	レシプロ式冷凍機	反复式制冷机组	
8	セントラル空調	中央空调	
9	地域冷暖房	区域供冷供热	
10	コージェネレーション	热电并给	
11	氷蓄熱	冰蓄冷	
12	オゾン	臭氧	
13	オゾン層	臭氧层	
14	フロン	氟利昂	
15	冷媒	冷媒, 制冷剂	
16	エチレングリコール	乙二醇	
17	冷水	冷水, 冷冻水	
18	冷却水	冷却水	
19	圧縮機	压缩机	
20	歯車室	齿轮箱	
21	増速歯車	增速齿轮	
22	羽根車	叶轮	
23	スラストベアリング	止推轴承	
24	ジャーナル軸受	径向轴承	
25	オイルタンク	油箱	
26	オイルヒーター	油加热器	
27	オイルクーラー	油冷却器	
28	誘導電動機	感应电动机	
29	ステーター	定子	
30	ローター	转子	
31	反時計まわり	逆时针旋转	
32	熱交換器	热交换器	
33	蒸発器	蒸发器	
34	凝縮器	冷凝器	
35	シェル	筒体, 壳体	
36	チューブ	管子, 铜管	
37	パス数	回程数	
38	汚れ係数	污垢系数	
39	水室	水室	
40	蝶番 (ちょうつがい)	铰链	
41	ノズル	接管	
42	相フランジ	配套法兰	
43	管板	管板	
44	リーマ加工	铰孔	
45	拡張	胀管	
46	ロックタイト	乐泰胶	
47	中間冷却器 (エコノマイザー)	经济器	
48	過冷却器 (サブクーラー)	过冷却器	

	日本語	中国語	備考
49	吸収器	吸收器	
50	高圧再生器	高压发生器	
51	低圧再生器	低压发生器	
52	臭化リチウム	溴化锂	
53	バーナー	燃烧器	
54	起動盤	启动柜	启动盘でも可
55	インバーター	变频器	
56	インターロック	连锁	
57	制御盤	控制柜	控制盘でも可
58	安全弁	安全阀	
59	アングル弁	角阀	
60	膨張弁	膨胀阀	
61	電磁弁	电磁阀	
62	のぞき窓	视镜	
63	アンカーボルト	地脚螺栓	
64	冷却塔	冷却塔	
65	かえり	毛刺	
66	酸洗い	酸洗	
67	磷酸被膜処理	磷化处理	磷酸盐被膜处理
68	開先	坡口	
69	開先を取る	开坡口	
70	継手	接头	
71	アーク溶接	电弧焊	
72	TIG溶接	氩弧焊	
73	電子ビーム溶接	电子束焊	
74	サブマージド溶接	埋弧焊	
75	脚長	焊脚	
76	のど厚	焊缝厚度	
77	スパッター	飞溅	
78	長手方向	长度方向	
79	WPS (溶接施工法仕様書)	焊接工艺规程	
80	PQR (施工法確認試験記録)	焊接工艺评定记录	焊接工艺评定报告とも言う。
81	WPQ (溶接士の資格認定とその記録)	焊工资格评定及其记录	
82	加工外注品	外协件	
83	放射線検査 (RT)	射线检测 (检查)	
84	超音波検査 (UT)	超声波检测 (检查)	
85	磁粉検査 (MT)	磁粉检测 (检查)	
86	浸透検査 (PT)	渗透检测 (检查)	
87	下塗り	底漆	
88	タッチアップ	修补漆	
89	ウォーターハンマー	水击	
90	サージング	喘振	
91	焼きいれ	淬火	
92	焼き戻し	回火	
93	焼きならし	正火	
94	焼きなまし (焼鈍)	退火	
95	力率	功率因数	
96	高調波	谐波	
97	トリップ	跳闸	
98	インターフェース	接口	
99	イーサネット	以太网	
100	LAN	区域网	

はじめてのおつかい 国交回復前中国訪問記

第一回 香港滞在～入境まで

釜屋 修

拙文が藤本会長のお目にとまり、転載しないかとのご下命であった。幸い東方書店のご快諾も得た。今ではすっかり近代化された深圳も当時は草深い「国境」の町でした。茫茫国十余年前の個人体験ではあるが、若い方々の何かの参考になれば幸甚です。

2004年8月 駒沢大学 釜屋 修

私の中国への「はじめてのおつかい」は1962年4月、国交回復までまだ十年と数ヶ月前であった。当時、中国行き旅券の発行を求めていくら運動しても旅券はおりず、結局は香港止まりの旅券で出発するしかなかった。この人間は大陸へ入る、とわかっているから、日本国としては香港以外での生命の保証はしませんよ、と外務省から言われた時代だった。大学卒業後2年、26歳、一年少しの商社勤務を経て、転職した日中貿易促進会からの春季広州交易会への派遣だった。この団体は文革が始まると「反中国団体」として強制解散させられることになる。ともかく、はじめての海外旅行、それも誰一人同行者のいない旅であった。香港を経由して大陸へ入境するという迂遠なコースだった。「兩個中国」論にはきわめて神経質な時代、台湾上空を通過する飛行機もダメと言われた時代であった。そんな緊張感は今では笑い話かもしれないが、その頃はみんなピリピリしていた。日本各地から直行便が飛び、短期だとビザもいらなくなった現在ではあるが、当時のささやかな体験の断片をふり返るのも歴史の記憶であろう。地名その他すべて当時のままにした。記憶違いや思いこみは避けがたいと思うが、お許しをいただきたい。

4月25日に羽田からボーイング機で香港啓徳空港へ向う。私が飛行機に乗るとなぜか隣が外国人である。北京からエアー・ドラゴンで香港に向った時は隣が大酒のみのオーストラリアの貿易商、中国のどこをまわったのかという私の質問に答えた地名の中に「ダリアン」というのがあった。それが「Dalian（大連）」の英語風読み方だとわかるのに数秒かかった。またある年の、北京から日本への機内では隣がアフリカの金持ちの若旦那風のビジネスマンで、堂堂と「I hate China!」と話す男だった。どうやら中国でのアフリカ人蔑視に相当な怒りを感じているようだった。鄭州から北京までは後述のチェコの技術者だった。そしてこのはじめての旅の香港までの隣は初老のフランス人だった。何も知らない東洋の青年に機内食で出たオレンジ型の容器に入ったシャーベットの食べ方などを教えてくれた。大陸へ入ったのは、4月28日だった。香港の啓徳空港には、約束の香港国際旅行社の出迎えがなく、私は目印のラベルを胸につけて空港ロビーで途方にくれていた。すると突然30歳くらいの男が現れ私のスーツケースの一つをつかんで走りだした。すわ、カッパライと、私は残りの荷物を下げて追いかけた。しかし、男は逃げるわけでもなく、走りながら私の方をふり返って微笑んでいるではないか。やっと追いついて中国語で話しかけたが通じないらしい。男は微笑みながら私を一台の車に誘導した。ようやく白タクの運転手でホテルの客引きらしいとわかる。彼は英語と広東語しか解さないらしい。英語で「どこのホテルか」と聞くので「Golden Gate」

と答えたが「No, No, Clover Hotel!」という。やむなくその白タクに乗ることにして、予定外のホテルに連れこまれた。当時大陸入りする人間の多くは中国国際旅行社と提携していたゴールデン・ゲイト（金門飯店）だったが、連れ込まれたのはクローバー・ホテル（高華飯店）であった。あとから、ここも中国国際旅行社と関係があって、大陸入りする日本人も利用しているとわかってホッとしたものだった。あわてて国際旅行社に電話を入れると、出迎えなくてごめんね、のあいさつもなく、そこに宿泊しろ、明日手続きに來い、とのことだった。幸い、ホテルのパートタイマーの老人呉日新さんが困っている私を助けてくれた。翌日、彼に付き添ってもらって香港島に渡った。スリがいっぱいだから気をつけて、とおどされながら、スター・フェリーに乗った。国際旅行社やイギリス領事館に出向いて入境手続きを済ませた。許可まで四日くらい待て、と言われた。書類上私の身分は「日本商人」である。不案内な香港で三日間待つことになった。スターリング・ポンド建てのトラベラーズ・チェックを両替しなければならない。白タクで運ばれる途中、いかめしい鉄格子の嵌った街角の両替屋で一度換金していたが、ホテルのフロントの相場表を見るとどうやら換金率が悪い。フロントの相場を頭にいれて、町の銀行を覗いてみた。銀行の方が条件がよさそうだったので、そちらで両替をすることにした。銀行の玄関にはターバンを巻いたひげ面のインド人ガードマンが銃を構えていた。窓口でもらった香港紙幣を確かめもしないでにホテルに帰り、改めて数えてみると金額が三分の一くらいしかない。いやはや、またもや騙されたかと思ったが、伝票をよく見るとポンドではなくアメリカ・ドルのレートになっている。米ドルは360円、ポンドは1,000円ちょっとの時代である。おそろおそろ窓口に出向き、拙い英語で間違いないかと抗議？した。窓口の銀行員はきわめて紳士的ですぐ誤りを認め、計算しなおしてくれた。香港への信用回復の第一歩であった。

エレベーターの女性はニコニコと愛想がいい。しかし二日に一度はチップをあげないと意地悪をされる。わたしの滞在は短かったが、一度だけ乗りこんで「四楼」と言ったのに六階でおろされたことがある。その日チップを渡していなかったのである。自分の部屋のではない、各階にある共用のトイレにはいった時も、用を足して出てきて手を洗おうとするとトイレにいたボーイが水道の蛇口をひねってくれ、洗い終わると 彼がタオルを差しだしてくれている。ちょっと大げさに「Thanhks your hospitality!」とお礼を言って立ち去ろうとしたら、彼が私の上着の裾をつかんで無言で微笑んでいるではないか。蛇口は自分でひねることができるし、ハンカチだって持っているのだが、ああ、これが香港なのだと思った。ポケットにいつも小銭を用意しておかなければならなかった。外からタクシーで帰るとワラワラと子どもたちが駆け寄ってきて、最初にドア・ノブに手をかけた子どもがチップを貰う権利を持つ。

ある夜、ホテルの上のラウンジでコーヒーを飲もうとしたら、下の食堂のウェイターが本を読んでいた。にっこり笑って話しかけてきた。彼は、若い日本人が「国語」を話すのに興味を持ったらしく、どこで学んだのか、これからどこへ行くのかと北京語で聞いてくる。「広東へ行くのか」となにやらうらやましそうだった。親戚でもない限り、一般の香港人には広州も遠い存在だったのだろうか。「それにしてもお前は英語がへただな。なぜもっと勉強しないのだ。Now English is all over the world!」と叱られる。「おれは広東語、北京

語、英語ができる。今は日本語をやっているんだ」と読んでいた本を見せてくれた。しかし、その本には「洋館建」などという古い日本語がいっぱい使われていて、私がいくつか指摘すると彼はむくれていた。

食堂で抱いた疑問を彼に聞いてみた。客からもらったチップを、誰もが部屋の隅の缶に入れているのはなぜだ、と。一人ひとり貰うチップの額は異なる、従業員の印象や客の懐具合で違って来る。それぞれ個人がそのままポケットにいれば不公平になるから、貯めておいて月末にみんなで均等配分する。そもそもホテルから貰う給料は収入の六割くらい、残りの四割はこのチップの分配で補うようになっている、というのが彼の答だった。でもおれのこのホテルでの仕事は銀行員について恵まれているのだ、とも補足した。不合理の中の助け合いの合理精神のようなものを感じて感心したものだ。新聞の映画欄を見る。北京語とか広東語吹き替えとか明示してある。ちょうど学生時代に読んだことのある、李英儒の「野火春風闖古城」が上映されていたので見に行くことにした。入ってしばらく見ているうちにふしぎなことに気づいた。観客が中央通路を境に二分されていて、画面の戦況の進展にあわせてそれぞれどちらから拍手が沸き起こるのである。大陸派と台湾派が左右に分かれて坐っていたのである。映画館の中で目撃した政治小景だった。

この時は一人だったから九龍城には入らなかった。その後の香港訪問の時には、日本へ来た時に世話したことのある「香港大公報」の副編集長に連れられて九龍城の中へ入ったことがある。「一人では入ってはダメ」と彼が言った、いりくんだ内部は、怖そうな男たちがいっぱいいた。家と家の間の狭い路地で麻薬を打っている女性の姿も見えた。ここがいちばんうまいんだよ、と小さな、決してきれいとはいえない店でご馳走になった。私には食べられない、あやしげな鳥料理だった。彼は奥さんも子どももみんな北京に置いていた。何度も旅行社に問い合わせ、四日目やっと入境となった。同じ日に社会党猪俣浩三夫妻、日中友好青年代表団、日赤労働者代表団も同じ日に入境したが、私以外は、みんな国賓待遇、税関もフリーパスだった。しかし「日本商人」の私は、スーツケースの隅から隅までひっくり返されての厳しい検査を受けた。幸い、変な持ち物はなかったのと少し中国語を話せたのが検査官（若いお嬢さんだった）の印象をよくしたようだった。ただ、友人に頼まれたタイプライターや、学生時代に文通していて卒論を書く時に自身の大学時代のテキストや資料を送ってくれた黒龍江省在住で東北師範大学卒業の楊さんに頼まれた中古カメラなどは、詳しく事情を聴取され、受け渡し後相手から領収書をもらい、出境時に税関に出すよう、念をおされた。

九龍から羅湖經由深圳へ。九龍駅では香港国際旅行社の龔さんが送ってくれた。羅湖のリゾートエリアに別荘風の家があった以外、当時は沿線に何もなかった。明日は中国へ、と決まった日の夜は眠れなかった。中国語学習後はじめて大陸の中国人と話せるのだと思うと、何を喋ろうかと頭の中でカッコイイことばを組みあげようとしたのである。しかし事実は小説より奇なり、ではなかった。これが国境かと思うような、なんの変哲もない板橋をたった一人で渡る。ふり返るとうしろにはユニオン・ジャックが、前を見ると五星紅旗が、映画のようににはためいてなくて、風のない初夏の空にどんよりと垂れていた。橋の向こうから若い中国人が近づいて来た。出迎えの中国国際旅行社の人間だとすぐにわかったが、近づいて握手を交わしてから私の口をついて出たのは、昨夜の練りに練ったことばとは似ても似つか

ぬ「今天天氣很好！」であった。雨が降っていないだけの、どんよりした天気だったのに。たちまち自己嫌悪にとらわれたが、そんな反省する暇もあらばこそ、相手の発したことばに仰天した。「釜屋はんでっか、よう来はりましたな」。こんなズブズブの大阪弁で迎えられようとは！ 啞然としている私に、「中国語上手でんな」と彼は追い討ちをかけた。「ええ天気でんな」なんて中国語にうまいも下手もあるもんか、とがっかりしたものだった。大阪は十三（じゅうそう）で鉄工所を経営している愛国華僑の息子で、ついこの間帰国して国際旅行社広東分会で働き始めたばかりの梁だ、と彼が自己紹介した。彼の案内で、前述の税関に行き、厳しい審査を受け、その後は食堂で大陸最初の食事をとり、一人広州行きの汽車を待つことになった。猪俣先生たちは先に行ったのか、「商人」とは別の貴賓室あたりで食事をしているのか、姿が見えない。梁さんも姿を見せず、私は昼下がりの誰もいない駅舎に一人でいた。

第二回 広東での日々

広州駅で上司の出迎えを受け宿舎の羊城賓館に入り、中国滞在の日々が始まった。日本商社の取引の状況を調べ中国側に問題解決の相談をしたり、また中国側の要望を日本側に伝達したりする毎日である。交易会の会場、商品陳列館にも出向く。機械商談やくらの取引で日本商社と中国国営会社の板ばさみになって苦労したこともあった。失敗も多々あった。そんな日常の中で今も忘れられないことがいくつかある。

ある日沙面の外交館街にあったベトナム大使館に呼ばれた。中国側の何人かも同行した。ベトナムの代表は「商務参事官」だった。「英語ができるか？」「フランス語は？」と聞かれ、どちらもダメとわかって会談？は中国語ですることになった。参事官がベトナム語で話し、それをベトナム側の通訳が中国語に訳し、私がそれを日本語に訳す。答えはその逆ルートを辿るというすさまじい迂遠な対話だった。実質どれくらいの時間だったのか、どこまで正確に伝わったのか、はなはだ怪しいものであったにちがいない。もちろん日中貿易や日越貿易の話も出たが、私たちの予想の領域を越えて、「三沢基地には米軍の飛行機は何機くらいいるのか」とか、私たちには答えられない在日米軍基地についての質問がいくつも飛び出した。トンキン湾事件と北爆は二年余後（64年）であるが、アメリカはすでに南ベトナムに4,000人もの軍事顧問を送りこんでいたし、キューバ危機の時代でもあった。そんな緊張感が何気ない参事官の話の中からピリピリ伝わってきて、はっきりした答の出せない私たちは余計緊張した。

しかし、広州の町は静かだった。旧市街には日差しよけの回廊を持った家々が並んでいた。うんと後になって、奥さんが広東生れのある大学教授が、奥さんの両親に結婚の許可を求めたためはじめて広州に来た時の印象を語ってくれたことがある。「あの回廊とその下で食べた早朝のお粥の味が忘れられない。いつかこの広州に住みたいとその時に思った」と。彼は後年その夢を実現することになる。

夕方に激しいスコールがくるが、子どもたちが裸で飛び出して風呂代わりにはしゃいでいた。越秀公園など当時はあまり人がいなくて、「聴雨亭」などというしゃれた名前の四阿などがあって、静かな公園だった。

古くからあるという愛群大厦は、風呂を頼むと下から桶で湯と水を運んでくるので、一度その様子を見ると二度と頼めなくなる、と宿泊者が語っていた。華僑を除くほとんどの外国人が集まった羊城賓館のエレベーターは運行中にすーっと停まる。スタッフが「又減電了!」と笑いながら中の電話機を取りあげる。

ホテルの玄関前にはタクシーと三輪が待機していた。タクシーは車種で値段が違う。ベンツがいちばん高かった。走行メータを見て鉛筆で引き算をして料金を教えてくれる。三輪に乗るのは勇気がいった。中国側からは彼らは「単幹戸」で客が乗らないと収入が増えないから乗ってやってくれと言われたが、尻を上げて漕ぐ年老いた中国人の後ろでふんぞり返るような形で乗るのは、植民地風景みたいでいやだった。何年か前に三輪に乗っていた日本人が、前から来た老婦人にいきなり石を投げられて負傷するという事件があった。婦人は周りの中国人に取り押さえられたが、夫と二人の息子を日本人に殺されていて、三輪に乗った日本人を見て咄嗟にそのことが記憶の奥から蘇って我を失ったということだった。

深夜おそく電報を打つために電報局へ出かけると、その頃始まる街路の清掃や糞尿集めの八車に出会う。人の多い昼間を避けて深夜から明け方にかけて出勤してくるのだ。北京へ打つ電報など苦勞して「電碼」を辞書で調べ、四桁の数字を並べて電報局の窓口へ持っていく。窓口には白いあごひげの老人がいて、私の拙い電文を見て、朱筆でピピッと字数を減らしていき、無言でニコッと微笑む。彼は、辞書など見ないで、すべての四桁数字を頭の中で漢字に変換できる。プロだとはいえ、うらやましかった。私の長い電文のまま発信した方が局としては儲かるのに、老電報局員は字数を減らす。私は電報代が少し安くなるから助かる。それ以上に、そうか、こういう風に簡便に作るのかと、無料の通信文の指導がうれしかった。何度かこの優しい老人の授業を受けたのが、今は懐かしい。

今では価値がなくなった「一分銭」もたいせつにされていた。郵便局で一分銭を落とした時、「まあいいや」と思っていると居合わせた老人が拾いあげ、右手につまんで高々と差しあげ大声で「誰的?」と叫んだ。老人は私が落としたところを見てはいなかった。なんだか恥ずかしくて「我的!」とは言えなかった。

酒が飲めない私はコーヒーを探した。町には喫茶店などない。ホテルの八階のラウンジで聞いてもそっけなく「没有!」。ところがある日顔なじみになったスタッフが「今天有咖啡啊!」と言う。大喜びで注文したが出てきたものはなんともふしぎな味。「どこのコーヒー?」と聞くと「北越」。今ではふしぎではないベトナムコーヒーだが、その時は、へえ、北ベトナムのコーヒーか、と思ったものである。珠江に繋留されている北ベトナムのバナナ・ボートは目にしていたが、コーヒーは知らなかった。その後、三、四日に一度くらいでコーヒーがある。その都度どこのものか聞く。「巴西」や「古巴」産も現れた。さすがにおいしいと思う。コーヒー一つにも大陸経済封鎖の状況がくっきりと影を落としていた。

中国の食糧事情はたいへんだったと思うが、外国人用の食堂では、肉もふんだんにあり、不自由はなかった。これはのちの北京での体験だが、ある日工作員のZさんに急ぎの用事が

あって探したが見つからない。ちょうど昼食時で、いつか聞いた地下の中国人の食堂にいるかもしれないと思い降りていった。食堂は、すでに配膳されていたがガランとしていた。思わず食器に盛られた食べ物に目が行った。品数は三点、雑穀の混じったご飯、野菜の煮物とスープだけだった。呆然と見つめていた私に、厨房から出てきた人が「何を見ているんだ、こんなところに入ってはいかん！」とすごい剣幕で、私は慌てて逃げ出した。また別の時に、工作員の一人が向こう脛を親指で押すとペコンとへこんでなかなか元に戻らない。明らかに栄養失調だった。「我們是橡膠肚子」、ない時はベルトをきつくしめて食べずにがまんできるのだ、と言う人もいた。「自然大災害」の最中だった。

娯楽は何もなかった。ビリヤードかピンポンだけだった。われわれの世話をしてくれる若い従業員の多くは、幼いが全国から集められた共産主義青年団のエリートで、赤いネッカチーフをしていた。そんな中の一人の黒龍江省の小劉とよく卓球をした。浅黒いきりっとした顔立ちの、「紅領巾」の似合う子だった。政治談義になると、彼女の口癖は「毛主席説……」だったのも微笑ましかった。食堂では各国の歌を流していたが、日本の曲はなぜか「さくらさくら」と「会津磐梯山」しかなかった。小劉たちが日本の歌を聞かせろと言うので「東京—北京」や「友情の架け橋」の中国語訳を教えてやったりもした。

食べ物でうれしかったのは、楊貴妃の愛したと言われる荔枝を貰ったこと。ある日、工作員の一人が、人間の背丈の半分くらいの大きな籠に青い果物をいっぱい入れて持ってきた。「まだ青いけど荔枝です。五日後に赤くなりますから、さっと食べてください。部屋において赤くなるのを楽しんでください」と言う。これが、楊貴妃が早馬をつないで長安まで運ばせた、でも途中で熟してしまって食べられなかったとか聞いたことのあるあの果物か、とつくづく眺めた。言われたとおりの目の保養をし、五日後に若者だけ何人が集まっていっせいに賞味した。缶詰などとは違うおいしさだった。

「生在蘇州、長在杭州、食在広州、死在柳州」と言われるが、広州は食い倒れの町である。その広州の高級料理店泮溪酒家へ行った。受付で毛筆の署名を要求されたが、ふと見ると郭沫若や巴金のみごとな毛筆の署名もあって驚いた。食事を終えるとシェフ自筆の品書きをくれた。料理名の下に四川数字で値段が書きこまれていた。話には聞いていた数字だが、実際に見るのははじめてだった。後から改ざんができないように工夫された文字だった。日本の若者が珍しかったのか、シェフが語りかけてきた。「何時までいるのか」「毎日ここへ食べに来い、二度と同じ物は出さない」と。私の給料ではムリな話だったが、うれしい誘惑だった。

帰る間際、私は入り口前の歩道に腰をおろしてタバコを吸っていた。右手から小学高学年の一隊が縦列で歩いてくる。手に手にタオルや水泳パンツをぶら下げている。隊伍の半分が私の前を通り過ぎたとき、先頭の少年が突然（と思えた）Uターンしてきて「外国人、握手！」と手を差し伸べてきた。私の手は二十数個の小さな手で揺さぶられた。私は「日本人」でも「東洋鬼子」でもなく「外国人」だった。当時の「国際主義」の一シーンだった。ホテルの各階のサービス台でも「我們怎樣招待外賓？」などという「黒板報」がさまざまな色チョークを使って書かれていた。

国際主義といえばこんなこともあった。在広州日本商社が合同でベトナム支援集会を開いた。最後に一社あたり「10元」のカンパを決議した。世話役の私は終了後ホテルの宴会係へ

電話して、借りたホールの代金を訊ねた。かなり高額でそれをカンパの中から支払うとベトナムへの支援金が減る。送話器を握ったまま困っていると、工作人員の幹部の一人が通りかかり、どうした、と聞く。わけを知った彼は、電話を代われ、と言って、激しい調子で宴会係を説得しはじめた。「日本の友人たちがベトナム支援の集会を開いたのだ、そんな集会の部屋代をとるのか！」私はハラハラして聞いていたが、結局部屋代は無料と決着した。無茶と言えば無茶であるが、それも当時の「国際主義」ではあった。

ある日工作人員が来て「次の日曜日の集体活動は温泉だ」と言う。「それはうれしいね、で、何温泉ですか」と聞く私に「温泉就是温泉吧！」実際は「從化温泉」だったのだが、「温泉」自身が固有名詞化していた。

溪流でのんびり釣りをしている初老の労働者風の人と話をした。東北の炭鉱で働いていて、一年休暇を貰い、療養している。毎日「太陽灯」を浴びて、後は散歩をしたり釣りを楽しんでいる、とのことだった。その時は、さすが社会主義、と思ったものだが、あるいは、高級幹部だったのかもしれない。

温泉にはバンガロー風の別荘が幾つもあって、何人かずつ部屋を割りあてられた。私はすこし年上の日本人と相部屋だったが、部屋に入って驚いた。大きなダブルベッド、もちろん南国風に白い紗の蚊帳つきである。そして枕が赤と緑である！二人思わず顔を見合わせた。

「ここはかつて蒋介石と宋美齡も泊まったことがあります」とは服務員の説明。まさかこの部屋では？ 部屋に引き込まれた温泉に満足して寝ようとしたら、入り口でガチャガチャ音がする。覗いて見ると完全武装の兵士が立っているではないか。そうか、台湾海峡に近いから、警備についてくれたんだ、と二人で勝手に納得して寝た。次の朝起きると、まだ兵士がいた。お礼を言って、なぜか、と聞いてみた。私たちが想像していた治安ではなく、虎が出てはいけないから、という答だったのには驚いた。

公園は有料だったが、ピンクの「外賓」のリボンをつけていると無料だった。百貨店で買い物する時も「ブルー・カード」と呼んでいた外国人優待割引カードがあった。安い商品が更に二割くらい割引になっていた。その公園で、ある日、うしろから「先生、擦鞋！」という声が聞こえた。振り向くと、靴磨き台をもった、当時の大陸ではめったに見かけない、野球帽の少年が立っていた。そんな商売をする少年がいるのか、と思ったが、話をしてみると香港から親といっしょにやって来た子どもで、香港で靴磨きをしていると言う。子どもだから大陸でもやっていいと思ったにちがいない。優しくお断りした。

第三回 北京で出会った人々～帰国

5月15日の交易会閉幕が近づくとみんなの関心は北京へ行けるかどうか集まった。希望を出した人々に、中国側からはなかなか返事が出ない。継続商談や新規の商談を抱えてみんないらいらしていた。廖承志氏が両親の亡命について来日した時の寄宿先の坊ちゃん、廖氏のことを「廖ちゃん」と呼んでいた兵庫県のタバコ商の老人Nさんはいち早く北京行きが

決まって出発して行った。廖氏との関係を知らない人たちは「どうして？」とふしぎがっていた。

私は幸い上司とともに北上することになった。白雲飛行場から乗りこんだのはソ連製イリュージン一七機、小型双発プロペラ機だった。駐機中も機内は機首から尾翼のほうにかけてかなり急な坂になっている。白いカッターシャツのお兄さんがゴム草履で乗りこんできてコックピットへ入っていく。続いて三つ編みをたらしした少女が籠に入れた飴を配りはじめた。なんの「威厳」もないパイロットとスチュワーデスだった。乗客は十数人、離陸すると急旋回でぐるぐる回りながら高度をとる。二、三人いた中国の幹部たちは飛行機に弱い。大部分の人たちは列車で北京に向ったが、同乗の人たちは忙しい幹部、やむなく飛行機になった人たちだった。機が揺れると、みんないっせいに座席の前のビニール袋に顔を突っこんでいた。

高度が低いから地上の様子がよく見える。ある所で、私が窓から地上を眺めていると、三つ編み「空中小姐」が近づいてきて下を指差し「シアンタン、シアンタン」と叫ぶ。私の怪訝な表情を見て、「毛主席的故郷！」と叫んだ。

鄭州で中型機に乗り換えたがやはりイリュージンであった。航空券に食事代が含まれていると思っていた私は食堂の服務員に追いかけられ、代金を払っている間に搭乗が遅れ、乗りこんでみると雲をつくような外国人の横しか座席が空いていなかった。何かを喋ってくるがわからない。三度目に英語で語りかけてきた。「お前の第一言語はなにか」「ではお互いにサード・ラングエイジの英語で話そう」と言っているようだ。仕方なくまずい英語で対応。冷や汗だらけの私を、日本人の仲間がニヤニヤ笑って見ている。彼はチェコの技術者で二年間の技術援助を終えて各地を観光し、まもなく北京から帰国するのだという。日本人たちが持っているルフトハンザやエールフランスのバッグをさして「日本には国営航空会社はないのか」といった質問をしにくる。社会主義国の人間らしい質問である。結局、北京まで私は好奇心の強い彼の餌食になってしまった。今となると、社会主義「崩壊」前のなつかしい記憶である。

北京では日本人は全員新僑飯店に入った。「日僑」飯店とも言われた。上司と二人の部屋は、駐在員事務所を兼ねた、広いツインベッドルームに応接室付で一日11元、一元が170円だったから日本円約1,870円だった。

食堂で中国人の仲間から「老パン」と呼ばれている主任がいた。私が通りかかった彼に「パン同志」と呼びかけると、彼はきつとなって「我不是姓胖的、我姓金」と言う。彼はまるまると肥っていた。仲間から「でぶさん」と呼ばれるのは許容していたが「東洋鬼子」の若造から呼ばれる筋合いはないと言わんばかりだった。その後私たちは友好関係を樹立した。

王府井ものんびりしていた。初夏、すでに暑かった。アイスクャンディー売りが、木陰に停めた自転車の荷台に箱を乗せ、毛布で保冷しながら売っている。「氷棍兒、氷棍兒、兩個一毛兒！」みんな二本買って両手に持ち、左右かわるがわるしゃぶっていた。まねをしてみる。

タバコは安い「大前門」や「飛馬」を買ったが、おいしかったのは今もある「牡丹」の青い箱のほうだった。上海南洋兄弟煙草公司——多分郁達夫の小説に出るN煙草公司是解放前のこの会社のことではないかと思う——の「巨龍」は並木道の風景の箱に入った、細巻きのしゃれたタバコだった。まだフィルター付はなかった。

東安市場は商品も少なく、戦後の日本のバラックのマーケットのような印象だった。しかし、中の古本屋は雑多な、おもしろい本があって興味深かった。茅盾の『蘇聯愛国戦争短篇小説訳叢』（上海永祥印書館、1946年10月初版、50年3月三版）などが手許に残っている。後述の丁玲の本もここで買ったものである。骨董品屋でハーモニカを並べていたので眺めていたらいきなり「ミヤタ先生元気か」と言う日本語が頭の上から落ちてきてびっくりした。見るとかなり年配の男性が私を見つめている。ミヤタ先生？ 誰のことだろう、どうして私がミヤタ先生なる人を知っていると思ったのか。だが、咄嗟にひらめいた。そうか、ハーモニカを見つめていたからだ！「是宮田東峰先生の事嗎？」と言うと老人はうれしそうに「是、是的」とうなずいた。宮田東峰先生と会ったことなどもちろんないが、名品ミヤタ・バンドは使っていた。お元気だと思いますよ、あなたは どうして日本語が上手なんですか、と話が弾み、上海製のハーモニカを買うこととなった。

ある日経済学者の謝南光さんが会いたいと言ってきた。上司に命じられて玄関で待つと、当時にしては珍しい、白い麻の背広に中折れ帽子という瀟洒ないでたちの謝さんがいらした。先生は何も見ないで「昨日の八幡製鉄（まだ新日鉄ではなかった）の粗鋼の出鉄量は××トンで……」とか「平炉から高炉への切替は……」と切り出し鉄鋼事情について意見を求められる。メモなんか見ないで数字をあげる。上司の答えを時々小さな手帳に書くぐらいである。私は圧倒されてただ陪席してかしこまっているしかなかった。

在北京日本人の数が戦後はじめて100人を越えた、と慶祝の乾杯をあげたこと等今では嘘のような事実である。

いくつか芝居や京劇、映画を観る機会があった。郭沫若の「蔡文姬」を首都劇場かどこかで観た日、トイレに行っていた私は送迎バスに置いてけぼりをくった。もはや誰もいない。仕方なく道路へ出て誰か通りがかりの人にも道を聞こうと思った。明るい車内灯をつけた満員のバスが通るが、もちろんもう路線バスが走る時間ではない。「夜校」の通学バスである。ようやく無灯の自転車がやって来た。わけを話し、ホテルまでの道を聞いたところ、自転車で送ってくれると言う。深夜近くの北京の町を、まったく見も知らない労働者風の中年男性の自転車の荷台に腰かけて送ってもらった。こんなさわやかな思い出は、60年代前半にはいくつもあった。

当時北京で有名な洋風レストランは「老莫」、モスクワ・レストランであった。場所は今と同じ所。ある時青年ばかり六、七人で出かけた。偶然ながら大部分が中国からの「回国日僑」青年、中国語を日本で学んだ「国内派」は私とあと一人ぐらいだった。当時は超高級レストラン、予約が必要だった。私たちは若さに任せて、行けば何とかなる、と乗りこんだのである。ところが、案の定、入り口で足止めされた。少年の服務員が、予約は？と聞く。外国人だから入れて欲しい、と言うとパスポートを見せろと言う。誰も持っていなかった。「外賓」のリボンも誰もつけていなかった。そのうち、少年が「外国人がこんな流暢な中国語を話すはずがない」と言い出した。それはそうだ、交渉の中心は「回国日僑」なのだ。じゃ、こいつの中国語を聞いてみろ、と誰かが私を突き出した。仕方なく日本の大学で中国語を勉強したのだ、と説明したが、少年は、やっぱり喋れるじゃないか、と外国人だと認めない。私は喜んでいいのか、微妙な立場に立たされた。最後に誰かが、君ではダメだ、主任を呼べ、と

言い、奥から主任が出てきて、やっと席につくことができた。その間ほぼ30分、料理が出てきたのはそれからさらに一時間後だった。90年代に入ってから行った時には、もう大衆化されていて夜八時以降はカラオケレストランになっていてがっかりしたことだった。「太子党」の溜まり場という新聞記事もあった。

ホテルの廊下を寝巻姿で歩く日本青年を見つけると「こらっ、廊下は国際社交場だぞ！」と怒鳴る女性がいた。作家鹿地亘氏の前夫人、池田幸子さんだった。だみ声で方言訛りの強い中国語を話すが、よく通じている。大原総一郎氏の委託を受けて日本民藝館に入れる中国民具も集めていた。鹿地亘氏の著作で池田さんのことを私が詳しく知るのはもっと後のことである。

北京の仕事が終り7月中旬何人かの日本人とともに帰国することになった。飛行機が何だったか、今は思い出せない。今度はイリュージンではなかった。機は順調に飛び、あと15分で広州とスチュワーデスが告げてまわったのに機はなかなか降下しない。これじゃ香港空域に入りイギリス軍機のスクランブル攻撃を受けるかもしれない、そうになったらあのイギリス人を窓から突き出そう(!)などと冗談交じりに心配していた。前の方の席に女性のイギリス外交官が手錠で手に公文書袋をつないで乗っていたのだ。やがて、雲海が厚く降りる隙間が見つからない、武漢へ戻って一泊すると、スチュワーデスが報告にきた。機はレーダーがなく有視界飛行だった。

夕闇迫る武漢に降り立ち旋宮飯店に入ったが、食堂はもう釜の火を落として何もつくれないという。困っていたらゴム草履の老人が現れ「お粥食うか？」と日本語で話しかけてくれ一同大喜びした。暑くて臭い町を散歩した。遅く9時頃からにぎやかな芝居が始まる。公園のいたるところに蚊帳を吊るしてベッドを入れてある。酷暑の町である。

まどろんだと思ったら早朝5時たたき起こされて長江を渡り飛行場へ。一日日程がずれたため、私たちは広州のホテルに寄らず、空港から鉄道駅へ向い、ホテルに預けてある荷物は旅行社がとってきて駅に届けてくれることになった。私は「北京からの帰りには寄るよ」と約束していた小劉に会えなかった。帰国後私より後に帰ってきた何人かが「広州で何したんだ？ 小劉が釜屋はまだかと探していたぜ」と言われたのはそんな事情だからだった。

帰りの深圳での荷物チェックも厳しかった。東安市場の古本屋で購入した丁玲の作品が三冊ばかり引っかかった。今度も若い女性検査員だったが「これは私の判断にあまるから上司の意見を聞いてくる」と本を持って二階に上がったまま降りてこない。大分経って厳しい顔つきの男性が来て「これらの本は審査にかけられる、持ち出しはできない。受け取りを渡すから次回この税関を通る時に提示せよ。最終持ち出し不可となった場合は、お前が古本屋に払った代金を返すから、値段を書いていけ」となった。『某夜』や『選集』だった。その後この受け取りは紛失したから、私の本の審査結果はどうだったのか、確かめる機会はなかった。

はじめてのおつかいから、茫々40年余、思いちがいは当然としても、自分でもふしぎなくらい、その時々ディテールを覚えている。私の訪中歴は多くないが、その後の訪問の記憶も、時には丹念に記録をとったこともあるが、総じて鮮明だと、自分では思っている。62年から文革で職場が崩壊させられるまで、訪日各種代表団に随行する機会も多かった。ダム電力視察団の団長はMIT卒業生で建国後帰国した著名学者だった。最初の訪問先である和歌

山県の七色ダムに行くため、東京からすぐ夜行列車に乗りこんだ。翌朝和歌山駅のホームで初対面のあいさつを交わした時、氏の中国語に一瞬戸惑ったら、即座に「Have you ever been in here?」と英語に切り替えられた。「My fair lady」は上映していないかとか、貝多芬のレコードを聞きたいとか、他の団員とは違う要望を出されていた。

東京・大阪の中国展では、会期中ずっと団に随行し、主に副団長の肖向前さんのお手伝いをし、その間に訪日した人民代表大会常務副委員長の南漢宸先生一行には肖さんとともに合流して全国を回った。油圧機械視察団の通訳だった周鴻慶さんのソ連大使館への亡命申請駆け込み、その後の帰国決定と大阪からの中国貨客船での帰国に至る、いわゆる「周鴻慶事件」では、飛行機で帰る場合の随行はお前だと指名され、驚くほどの速さで外務省から発行されたパスポートを胸に待機したものだ。結局大阪港から中国貨客船で帰ることになり、私の任務は解かれた。伊丹空港へ岡崎嘉平太氏の特別機で飛んできた周氏を船に乗せるまでの、映画のような「脱出劇」に参画したのも忘れられない。

ビニロン・プラントの視察団と来て、団から外れて単独行動をとった対外貿易局のLさんの秘書に指名されて、二人相部屋で動きまわったのも懐かしい。文革後、奥さんや娘さんたちにも会えた。Lさんがいつも胸ポケットに入れていた、可愛い次男か三男かの「東風」君は、ご夫妻が文革で「下放」されている間に「人攫い」にあい、とうとう行き方がわからなかった。

ダム電力の団長が、旅館の主に揮毫を懇望されて、色紙に私の大好きな杜甫の長詩「贈衛八処士」を書きはじめた。みごとな筆である。わくわくしながら見ていると、「人生不相見 動如參與商」からはじまって、「夜雨剪春韭」まで来るとピタッと筆が止まってしまった。思わず「新炊間黄粱」と呟いた私を団長がふり返ってニッコリ笑ってくれた。高校時代に覚えていたあの長い詩の一句がすんなり出て自分でも驚いたが、古典の素養などない私の、まったくラッキーな記憶が、団長の私への勘違い評価を上昇させ、先ほどの映画やベートーベン要求にもなったのかもしれない。

「参」と「商」は天空の西南と東方に「相背いて出で」「ぜったいに相い会わぬことのたとえ」という（岩波『中国詩人全集』黒川洋一）。南老は文革で自殺された。MIT帰りのあの団長はどうされただろうか。杜甫の詩は友人との再会を喜びつつ、最後に「明日隔山岳 世事兩茫茫」と結ぶ。あの頃ともに仕事をした人たちと会うことはない。私は34歳で大学院に入り、貿易の仕事から離れた。【完】

東方書店『東方』2004年2、3、4月号に連載されたものです。

アンケート

ビジネス中国語検定及びその教材についてのアンケート結果報告：

アンケート送付先：第二外国語として中国語を開講している大学・専門学校を含む 58 校

アンケート回収率：15 校、19 名 32.7%

- 1) ビジネス中国語（貿易・実用・実践など実務中国語を含む）にご関心をお持ちですか。
ある（13） ない（1） 無記入（1）
- 2) 貴学ではビジネス中国語関連の教科を開講していらっしゃいますか。
開設している 14 校
沖縄大学・中国語研修学校・名古屋外国語大学・流通科学大学・関西外国語大学・大阪外国語大学・神戸外国語大学・神田外国語大学・東北公益文科大学・杏林大学・姫路独協大学・東海大学・駒沢大学（時事中国語として 2・4 年次）・京都外国語大学
- 3) 必修科目ですか、それとも選択科目ですか。
必修科目：（なし） 選択必修科目：1 校 選択科目：11 校
- 4) 何年次に履修しますか。2003 年度の履修者数は何名でしたか。
4 年次 11 名、30 名、
3・4 年次： 36 名・36 名・35 名、時事中国語課 36 名・商業中国語 15 名・
中国語通訳法 14 名、32 名・22 名、
3 年次： 6 名、35 名
2・3 年次： 約 40 名、
2 年次： 30 名、
1 年次： 70 名、
年次関係なし： 12 名
- 5) ビジネス中国語関連授業は週何コマですか。
通年 1 コマ： 大阪外大・神戸外大・京都外大・東海大学・神田外大・東北公益文科大学・姫路独協大学・関西外大外国語学部・名古屋外大
通年 2 コマ： 沖縄大学・中国語研修学校・神田外大・関西外大国際言語学部・
通年 3 コマ： 杏林大学・
- 6) 教材は何を使っておられますか。（プリントの場合にも、その旨ご記入ください）
教材・出版社名：新聞記事その他プリント、自作プリント、白帝社の「ビジネス中国語」、時事中国語、中国語 TV のビデオなど自主教材、メールで時事中国語（東方書店）、ビジネス中国語マニュアル（東方書店）、2003 年度版時事中国語の教科書（朝日出版）、漢語外口語（北京言語大学）、実践ビジネス中国語会話（白帝社）、楽楽中国語、日本国際貿易促進協会編日中ビジネス文例辞典、ビジネス中国語キーワード（語研）、中国語ジャーナル（アルク）、商業通信文（東方書店）、新聞中国語（東方書店）
- 7) 日本ビジネス中国語学会が毎年年末に実施している、ビジネス中国語検定試験のこと

をご存知ですか。

知っている（15校）

8) 知っているとお答えになった方に：

貴学の学生は過去この検定試験を受験していますか。受験人数は毎回何名程度ですか。

（2～3名・3名・約40名・5～6名）受験している 受験していない学校（5）

9) 経済界は、国際化の進展、対中経済交流の拡大につれて、中国語分野においても、ますます即戦力になる人材を求めています。ビジネス中国語教育に関して、教材・教授法・その他につき、日本ビジネス中国語学会に対する期待・要望など、率直なご意見をお聞かせください。

（この設問に対して寄せられた意見を、順不同・無記名にてご紹介します。）

- 中国語を学ぶ学生が強い関心を示していますが、有効な授業方法、テキストなど本学での体制は整っていません。良いテキストを紹介して頂けたら、大変助かります。
- ①総会、講演会開催後の会報配布について、現状かなり時間を要しているので、準備などで大変でしょうが、もう少し配布を短縮して頂ければ幸甚です。コストのかからない作成、印刷方法でも良いと思います。
- ②会員に対する中国における進出企業のビジネス活動の状況、中国での中国語教育の現状（外国人に対する）等のテーマで、中国訪問、視察の「特別企画」をご検討頂ければと思います。（希望者を対象として）
- ③久しぶりの11月後半の東京での会合企画の件有難うございます。将来の計画として、何年に1回開催とか事務局で関東地区での開催のご検討があるのかお伺い致します。
- 本学には中国語と関連する専攻課程がなく、今のところ特別な要望はありません。
- 弊センターは留学事業のほかに仕事支援などの事業しています。今後通訳人材の養成等に付き実施する予定あります。貴会の検定を是非とも利用したいと思います。どうか貴会の事業に協力いたします。
- ニーズが非常に高い分野だと思う。交渉力は狭い意味の「聴、説」でカバーしきれない要素が多いと思う。有効な教授法を知りたい。
- 1, 2年次に初・中級中国語を履修した学生に3年次でビジネス中国語を選択させることは、今後学部を問わず必要になってこよう。本学の場合まだ全く手付かずの状況にあり、学会には啓蒙、宣伝の強化をお願いしたい。
- ビジネス関連の教材は、実用的だが厚すぎ、週1回の授業ではとても消化できない。もっと平易で「体験型」で、学生が満足感を得られるものが欲しい。ビジネス文に入る前に、特に文学部の学生には、政府の構造、中国の地理、歴史などを中国語の単語で押さえさせる導入部が必要。教科書は一般に執筆から出版まで時間がかかりすぎ、アップツーデートな内容とは言い難い。

- 学会の関東地区での開催。 中国進出日本企業との合同勉強会。
- 大学でのビジネス中国語教育はもっと普及して然るべきだと思います。ただ大学での授業に適したテキストスタイルの教材が少ないと思うので、目下検討中です。
- ① 2年次からの履修となっており、基本的にビジネス中国語としては3年次からでなければ本格的展開は難しい。(1年次に初めて中国語を学習し始めたとして考えた場合)
- ② ビジネス英語との比較が必要と思われる。
- ビジネス中国語に携わっている者のみならず、中国語教育の関係者の語学力の底上げや意識の向上がまず第一である。そのカベを乗り越えないであれば、国際化、まして日中の本格的な経済交流に対応できないものと思っております。(総会その他の場で、さらに申し述べたいと考えています。)
- 週1コマで、しかも多人数なので苦戦しています。
- 今後本学会を広める上でも、また、ビジネス中国語普及により、検定試験合格者の雇用、就職促進のため、学会が日中経済貿易関係企業への宣伝を強化する必要があると思います。3級、2級がどの程度なのか、宣伝用の資料を作成して、送付してはどうでしょう。
- 本来充実すべき科目でありながら、昨今は興味を示さない学生が入ってきています。事実上ビジネス中国語の授業は行われていません。なんとか手を打たなければいけないように思うのですが、困って苦悩しています。当方の問題かもしれません。

以上

日本ビジネス中国語学会

設立趣意書

明治以来終戦時に至るまでの間、わが国の外国語教育は、先進文化を吸収するための文化語学と、近隣諸国との軍事・通商に備えるための実用語学にはっきりと分かれていました。従って文化語学はアカデミックな研究であり、実用語学は技術的訓練にしかすぎないと見られてきました。そういう潮流の中で、中国語学界のエリートたちは、中国語学を文化語学としてアカデミックな研究の対象にしようと、第2次大戦末期に力説されるようになりました。

第2次大戦後は、曲がりなりにも中国語学はアカデミズムの片隅にその位置を見つけ、大学の教員もアカデミックな研究によって自分の業績を作るようになりました。しかし、一方で実用語学としての中国語学は軽視されるに到りました。外国語大学や社会科学系学部でも、商業経済や新聞雑誌に関する中国語研究は次第におろそかになり、そのため、この方面の研究に従事する人々は、共同に研究する基盤もなく業績を発表する媒体もないという有様であります。

言うまでもなく、日本のおかれている国際的地位は明治・大正と大いに異り、外国文化に関する見方も先進・落後という単純な区別はなくなり、わが国と中国との関係もまた文化から経済まで広くかつ深いものになっています。中国語の言語理論的研究はもちろんより一層発展させる必要があります。同時に中国語の実用的研究はそれ以上必要であると思われまゝす。

近畿在住の数人の研究者が時折顔を会わせて論議しているうちに、全国各地に散在しているそしてまた学界のみならず経済界で活躍しているこの方面の研究者を結集して、中国語の実用的研究——例えばビジネス中国語・通訳翻訳の研究等々を組織的、体系的に推進するために、ここに「日本ビジネス中国語学会」をつくろう、という議が持ちあがりました。

趣旨に賛同下さる方々のご参加を心から期待しています。

日本ビジネス中国語学会会則

第1条 (名 称)

本会は日本ビジネス中国語学会と称する。

第2条 (事務所)

本会は事務所を大阪市内に置く。

第3条 (目 的)

本会はビジネス中国語に関する研究及び関係諸団体との交流を通じて、我が国における中国語学習者の語学能力の向上を図り、もって日本と中国の友好交流の発展に寄与することを目的とする。

第4条 (事 業)

本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

会長は必要に応じて事業推進グループを設置することができる。

1. ビジネス中国語、翻訳・通訳に関する研究。
2. 日中間の相互理解を深める為の教育・研修事業。
3. セミナー、講演会の開催。
4. 機関紙の発行。
5. ビジネス中国語検定。
6. その他前各号に関連する事業。

第5条 (会 員)

本会の会員は次の通りとする。

個人会員 本会の目的に賛同して入会した個人。

法人会員 本会の目的に賛同して入会した法人。

第6条 (入 会)

本会の会員になろうとする者は、別に定める入会申込書を提出し、承認を得なければならない。

第7条 (退 会)

①本会を退会しようとする時は、理由を付した退会届けを提出しなければならない。

②会員は次の各号の一に該当するときは、退会したものとみなす。

1. 会費を2年以上滞納したとき。
2. 死亡したとき。
3. 会員たる法人が解散したとき。

第8条 (除 名)

会員が本会の名誉を傷つけ、又はこの会則に違反したときは、総会の決議により、除名することができる。

第9条 (役 員)

①本会に次の役員を置く。

会長 1名 理事長 1名 理事 10名以上15名以内 会計監事 2名

②理事及び会計監事は、会員の中から総会において選任する。

③会長及び理事長は、理事の互選とする。

④法人会員の代表は役員の被選任資格を有する。

第10条 (役員の職務)

①会長は、本会を代表し、会務を統括する。

②理事長は、会長を補佐し、会務を処理する。会長に事故あるときは、その職務を代行する。

③理事は、理事会を組織し、会務を執行する。

④会計監事は、経理を監査する。

第11条 (役員の任期)

①役員の任期は、2年とする。但し再任を妨げない。

②補欠により就任した役員の任期は、前任者の残存期間とする。

第12条 (役員の報酬)

①役員は、原則として、無給とする。但し、常任の役員は、有給とすることができる。

②常勤の役員の報酬は、理事会の決議により定める。

第13条 (顧 問)

①本会に顧問、相談役若干名を置くことができる。

②顧問、相談役等は理事会の議決を得てこれを委嘱する。

第14条 (総 会)

①総会は、定時総会及び臨時総会とする。

②総会は会員をもって構成し、この会則に規定するもののほか、次の事項を決議する。

1. 事業計画及び収支予算。
2. 事業報告及び収支決算。
3. その他本会の運営に関する重要事項。

第15条 (総会の召集)

①総会は会長が召集する。

②総会を召集するには、会議の議題並びに日時・場所を開催日の10日以前に通知しなければならない。

第16条（総会の開催）

- ①定時総会は、毎年1回会計年度終了後3ヶ月以内に開催する。
- ②臨時総会は、理事会が必要と認めたとき、又は会員の5分の1以上の請求があったときに開催する。
- ③総会の議長は、会長がこれにあたる。

第17条（総会の議事）

- ①会員はそれぞれの一個の議決権を有する。
- ②会員は他の会員に代理出席を委任することができる。
- ③総会の決議は、出席会員の過半数をもって行う。

第18条（理事会）

理事会は、理事をもって構成し、この会則に定められるべきもののほか、次の事項を処理する。

1. 総会における決議事項の執行。
2. 総会に付議すべき事項。
3. 資産の管理。

第19条（理事会の召集）

- ①理事会は年1回以上開催し、会長が召集する。
- ②議長は会長がこれに当たる。

第20条（理事会の決議）

- ①理事会の決議は出席理事の過半数をもって行う。
- ②理事は他の理事に代理出席を委任することができる。

第21条（資 金）

本会は下記の資金により運営する。

1. 会費並びに寄付金。
2. 事業収入及びその他の収入。

第22条（会計年度）

本会の会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

第23条（事務局）

- ①本会の事務を処理するために、事務局を置く。
- ②事務局は、理事長が統括する。
- ③事務局に常勤する職員は有給とすることができる。

第24条（会則の変更）

会則の変更は会員の3分の2以上の承認を要するものとする。

- 付則
1. 本会は1990年12月8日から発足する。
 2. 本会の最初の役員は設立発起人がこれにあたる。
 3. 2002年6月29日、一部改訂

役 員 名 簿

（2006年の総会まで）

会 長	藤 本 恒	京都文教大学
理 事 長	榎 原 茂 樹	大阪外国語大学
		神戸市外国語大学
会計監事	待 場 裕 子	流通科学大学
理 事	伊 井 健一郎	姫路獨協大学
理 事	神 崎 多實子	N H K B S ・ 通 訳
理 事	上 林 紀 子	京都外国語大学
理 事	興 水 優	日本大学
理 事	武 吉 次 朗	前摂南大学
理 事	塚 本 慶 一	神田外国語大学
理 事	戸 毛 敏 美	関西外国語大学
理 事	橋 本 南都子	東海大学
事務局長	岩 下 孝 彦	大阪中国語学院

会報 第14号 2004年8月31日 発行

日本ビジネス中国語学会

〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北2番26号 マルサンビル4F

日中語学センター気付

電話 06-6353-2442 FAX 06-6353-0664